

「エペソでの奉仕」

使徒 19：8～12

1. はじめに

(1) 第三次伝道旅行が始まった。

- ①使 18：23～21：17（紀元 53 年の春から 56 年の春）
- ②未信者への伝道ではなく、フォローアップが主な目的の旅である。
- ③第一次伝道旅行で立てられた諸教会（ガラテヤ地方とフルギヤ）を訪問した。
- ④第三次伝道旅行の中心地は、エペソである。

＊ルカは、自由人としてのパウロの伝道活動の集大成を記している。

＊パウロは、約 3 年の間エペソに留まった。

＊教会史におけるエペソ伝道の重要性を見落としてはならない。

(2) エペソでのパウロの奉仕（サンドイッチ形式の記述）

- ①12 人の弟子たちのエピソード（1～7 節）
- ②エペソでの奉仕（8～12 節）
- ③スケアの 7 人の息子たち（13～20 節）

(3) エペソでの奉仕（8～12 節）

- ①会堂での奉仕（8～9 節 a）
- ②ツラノの講堂での奉仕（9b～10 節）
- ③癒しと悪霊の追い出し（11～12 節）

結論：

- (1) パウロのメッセージの強調点は、神の国である。
- (2) パウロの伝道の最大の拠点は、エペソである。

エペソでの伝道について学ぶ。

I. 会堂での奉仕（8～9 節 a）

1. 8 節

Act 19:8 それから、パウロは会堂に入って、三か月の間大胆に語り、神の国について論じて、彼らを説得しようと努めた。

- (1) エペソのユダヤ人たち（会堂）は、パウロに好意的であった。

- ①エペソは国際的都市であった。

②このユダヤ人たちはコスモポリタン。他の町のユダヤ人たちよりも寛容。

*テル・アビブのユダヤ人とエルサレムのユダヤ人は違う。

③第二次伝道旅行の終わりに、パウロはエペソを訪問していた（使 18:19～21）。

Act 18:19 彼らがエペソに着くと、パウロはふたりをそこに残し、自分だけ会堂に入って、ユダヤ人たちと論じた。

Act 18:20 人々は、もっと長くどまるように頼んだが、彼は聞き入れないで、

Act 18:21 「神のみこころなら、またあなたがたのところに帰って来ます」と言って別れを告げ、エペソから船出した。

④パウロが再びエペソに戻る前に、アポロは会堂で伝道していた（使 18:24～26）。

Act 18:24 さて、アレキサンドリヤの生まれで、雄弁なアポロというユダヤ人がエペソに来た。彼は聖書に通じていた。

Act 18:25 この人は、主の道の教えを受け、霊に燃えて、イエスのことを正確に語り、また教えていたが、ただヨハネのバプテスマしか知らなかった。

Act 18:26 彼は会堂で大胆に話し始めた。それを聞いていたプリスキラとアクラは、彼を招き入れて、神の道をもっと正確に彼に説明した。

(2) 3ヶ月間の会堂での奉仕

①パウロは、先ずユダヤ人に、次に異邦人に、という伝道の原則を実践した。

②エペソのユダヤ人たちは、アポロの時と同じように、パウロとも論じ合った。

③この討論は、3ヶ月も続いた。

*迫害や裁判なしに伝道を継続できたのは、これが最長記録である。

④パウロのメッセージの中心は、「神の国」であった。

2. 9節 a

Act 19:9a しかし、ある者たちが心をかたくなにして聞き入れず、会衆の前で、この道のをのしだったので、

(1) 長引く討論に飽き飽きしたユダヤ人たちが出て来た。

①彼らは、知的に頑なになった。

②さらに、信者たちを見下し、悪く言うようになった。

(2) 「この道のことを悪く言った」

①会堂で3ヶ月の奉仕が続いた時点で、ユダヤ人たちは福音を拒否した。

②そこでパウロは、異邦人伝道に向った。

③教会誕生から約25年が経過しても、キリスト教は「この道」と呼ばれている。

④使 9:1～2

Act 9:1 さてサウロは、なおも主の弟子たちに対する脅かしと殺害の意に燃えて、大祭司のところに行き、

Act 9:2 ダマスコの諸会堂あての手紙を書いてくれるよう頼んだ。それは、この道の者であれば男でも女でも、見つけ次第縛り上げてエルサレムに引いて来るためであった。

⑤使 19 : 23

Act 19:23 そのころ、この道のことから、ただならぬ騒動が持ち上がった。

Ⅱ. ツラノの講堂での奉仕 (9b~10 節)

1. 9 節 b

Act 19:9b パウロは彼らから身を引き、弟子たちをも退かせて、毎日ツラノの講堂で論じた。

(1) ツラノの講堂が新しい伝道の拠点となった。

①パウロとユダヤ人信者たちは、会堂を去って新しい拠点に移動した。

②コリントでは、テテオ・ユストの家が拠点となった（使 18 : 7）。

Act 18:7 そして、そこを去って、神を敬うテテオ・ユストという人の家に行った。その家は会堂の隣であった。

③ギリシア人のツラノという人物の所有物件を借りて、そこで毎日論じた。

④ツラノは、巡回教師たちに講堂を貸していたと思われる。

(2) パウロが教えた時間は、午後である（シエスタ）。

①Codex Beza (Western Text) では、午前 11 時から午後 4 時と書かれている。

*恐らくこれは、正確な伝承だと思われる。

②パウロは、午前中と夕刻には、労働をしたのであろう。

2. 10 節

Act 19:10 これが二年の間続いたので、アジアに住む者はみな、ユダヤ人もギリシヤ人も主のことばを聞いた。

(1) ツラノの講堂での奉仕は、2 年続いた。

①使 20 : 31

Act 20:31 ですから、目をさましていなさい。私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがたひとりひとりを訓戒し続けて来たことを、思い出してください。

②3 ヶ月+2 年は、ヘブル的には 3 年である。

③アジアに住む人々はみな、福音を聞いた。

Ⅲ. 癒しと悪霊の追い出し（11～12節）

1. 11節

Act 19:11 神はパウロの手によって驚くべき奇蹟を行われた。

(1) 病人の癒しは、エペソ伝道に伴った神の御業である。

①パウロに癒しの能力が備わっていたということではない。

②驚くべき力あるわざを行っているのは、神である。

③パウロは、自分の思い通りに癒しを行えたわけではない。

④2 コリ 12：7～8

2Co 12:7 また、その啓示があまりにもすばらしいからです。そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。

2Co 12:8 このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。

⑤1 テモ 5：23

1Ti 5:23 これからは水ばかり飲まないで、胃のために、また、たびたび起こる病気のためにも、少量のぶどう酒を用いなさい。

⑥2 テモ 4：20

2Ti 4:20 エラストはコリントにとどまり、トロピモは病気のためにミレトに残して来ました。

2. 12節

Act 19:12 パウロの身に着けている手ぬぐいや前掛けをはずして病人に当てると、その病気は去り、悪霊は出て行った。

(1) 彼が身に着けていた手ぬぐいや前掛けを病人たちに当てただけで、彼らは癒された。

①使用したのは、天幕職人の手ぬぐいや前掛けである。

＊病気が、間接的方法で癒された。

②悪霊も出て行った。

(2) これらの奇蹟は、パウロが語るメッセージを保証するための「しるし」であった。

①ペテロの奉仕に似ている（使 5：15～16）。

Act 5:15 ついに、人々は病人を大通りへ運び出し、寝台や寝床の上に寝かせ、ペテロが通りかかるときには、せめてその影でも、だれかにかかるようになるほどになった。

Act 5:16 また、エルサレムの付近の町々から、大ぜいの人が、病人や、汚れた霊に苦しめられている人などを連れて集まって来たが、その全部がいやされた。

②手ぬぐいや前掛けに神秘的な力があつたわけではない。

③神の力が顕著に表われたということを証明する外的証拠である。

- ④迷信や魔術が横行していたエペソでは、これらの「しるし」が必要であった。
- ⑤今日、同じことを行っても意味はない。
- ⑥万が一癒しが起ったとしても、それは神の御業ではない。

(3) ここで悪霊の追い出しが出て来るのは、説明を次の箇所につなげるためである。

- ①スケワの7人の息子たちのエピソード

結論：

1. パウロのメッセージの強調点は、神の国である。

(1) 使 19：8

Act 19:8 それから、パウロは会堂に入って、三か月の間大胆に語り、神の国について論じて、彼らを説得しようと努めた。

(2) 推察される討論の展開

- ①ナザレのイエスは、ヘブル語聖書が預言しているユダヤ人のメシアである。
- ②この方は、十字架に架かり、墓に葬られ、3日目に復活された。
- ③ユダヤ人たちが信仰に踏み込めない最後の理由は、ではなぜ、メシア的王国がまだ実現していないのかという疑問である。
- ④「神の国」とは、メシア的王国（千年王国）のことである。

(3) ユダヤ人にとっては、メシア的王国は最終的な希望である。

①使 1：3

Act 1:3 イエスは苦しみを受けた後、四十日の間、彼らに現れて、神の国のことを語り、数多くの確かな証拠をもって、ご自分が生きていることを使徒たちに示された。

②使 1：6～7

Act 1:6 そこで、彼らは、いっしょに集まったとき、イエスにこう尋ねた。「主よ。今こそ、イスラエルのために国を再興してくださるのですか。」

Act 1:7 イエスは言われた。「いつとか、どんなときとかいうことは、あなたがたは知らなくてもよいのです。それは、父がご自分の権威をもってお定めになっています。」

③使 28：23

Act 28:23 そこで、彼らは日を定めて、さらに大ぜいでパウロの宿にやって来た。彼は朝から晩まで語り続けた。神の国のことをあかしし、また、モーセの律法と預言者たちの書によって、イエスのことについて彼らを説得しようとした。

④使 28：30～31

Act 28:30 こうしてパウロは満二年の間、自費で借りた家に住み、たずねて来る人たちをみな迎えて、

Act 28:31 大胆に、少しも妨げられることなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。

2. パウロの伝道の最大の拠点、エペソである。

(1) 使 19 : 10

Act 19:10 これが二年の間続いたので、アジアに住む者はみな、ユダヤ人もギリシヤ人も主のことばを聞いた。

①2年間、毎日、パウロは聖書を教えた。

②その結果、アジア州の住民たちの多くが、神のことばを聞く機会に恵まれた。

*ユダヤ人も異邦人も、福音を聞いた。

(2) アジア州における種々の教会の誕生

①コロ 4 : 12~13

Col 4:12 あなたがたの仲間のひとり、キリスト・イエスのしもべエパfrasが、あなたがたによろしくと言っています。彼はいつも、あなたがたが完全な人となり、また神のすべてのみこころを十分に確信して立つことができるよう、あなたがたのために祈りに励んでいます。

Col 4:13 私はあかしします。彼はあなたがたのために、またラオデキヤとヒエラポリスにいる人々のために、非常に苦勞しています。

*リカス溪谷に誕生した教会（パウロから学んだ信者たちの働きであろう）

*コロサイ、ラオデキヤ、ヒエラポリス

③黙 2~3 章に登場するそれ以外の教会は、この時期に誕生したと思われる。

*スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィア

(3) 私たちへの教訓

①奉仕の集大成の土台には、忠実な奉仕の蓄積がある。

②奉仕が実を結ぶためには、神に用いやすいしもべとしての成長が必要である。

*救霊の働きを行うのは、復活のイエス・キリストである。

③物理的な活動量は減るが、霊的な成果は増える。

④弟子訓練を通して、伝道が拡大する。

「スケアの7人の息子たち」

使徒 19：13～20

1. はじめに

(1) 第三次伝道旅行が始まった。

①使 18：23～21：17（紀元53年の春から56年の春）

②第三次伝道旅行の中心地は、エペソである。

*ルカは、自由人としてのパウロの伝道活動の集大成を記している。

*パウロは、約3年の間エペソに留まった。

*教会史におけるエペソ伝道の重要性を見落としてはならない。

(2) エペソでのパウロの奉仕（サンドイッチ形式の記述）

①12人の弟子たちのエピソード（1～7節）

②エペソでの奉仕（8～12節）

③スケアの7人の息子たち（13～20節）

*このエピソードは、エペソを覆っていた霊的暗黒を示している。

*また、イエス・キリストと福音の力を示している。

(3) スケアの7人の息子たち（13～20節）

①パウロの奇跡の模倣（13～14節）

②悪霊の逆襲（15～16節）

③このエピソードの結末（17～20節）

結論：

(1) パウロの悪霊との対決

(2) 罪や悪習慣との決別

スケアの7人の息子たちのエピソードについて学ぶ。

I. パウロの奇跡の模倣（13～14節）

1. 13～14節

Act 19:13 ところが、諸国を巡回しているユダヤ人の魔よけ祈禱師の中のある者たちも、ためしに、悪霊につかれている者に向かって主イエスの御名をととなえ、「パウロの宣べ伝えているイエスによって、おまえたちに命じる」と言ってみた。

Act 19:14 そういうことをしたのは、ユダヤの祭司長スケアという人の七人の息子たちであ

った。

(1) 「ところが」

①重要な接続詞である。

＊ギリシア語で「デ」である。

＊英語で、「but」「then」である。

②この出来事は、神がパウロを通して行われた良き奇跡との対比になっている。

③ペテロに起ったのと同じことがパウロにも起っている。

＊使8:18～19(サマリアの魔術師シモン)

Act 8:18 使徒たちが手を置くと御霊が与えられるのを見たシモンは、使徒たちのところに金を持って来て、

Act 8:19 「私が手を置いた者がだれでも聖霊を受けられるように、この權威を私にも下さい」と言った。

④ここでは、パウロの奇跡をコピーしようとする者が現れた。

⑤ユダヤ人の巡回魔除け祈祷師の中のある者たちがそれを行った。

(2) 「主イエスの御名をととなえ、」

①ユダヤ教の中にも、悪霊の追い出しを行なう者がいた。

＊いわば、当時のユダヤ教のカルト教団である。

②彼らは、イエスの御名に魔術的な力が宿っていると誤解した。

＊イエスの御名を唱えただけで、悪霊は出て行くと思った。

③おまじないの中で魔術的な名前を唱えることは、当時よく見られた現象である。

＊特にエペソでは、それが活発に行われていた。

④当時の人々は、ユダヤ人を恐れていた。

＊ユダヤ人が発音しない「神の御名」が、ユダヤ人の力の源であると考えた。

＊また、「神の御名」がビジネスで成功する秘訣であると考えた。

(3) ルカ9:49～50のエピソード

Luk 9:49 ヨハネが答えて言った。「先生。私たちは、先生の名を唱えて悪霊を追い出している者を見ましたが、やめさせました。私たちの仲間ではないので、やめさせたのです。」

Luk 9:50 しかしイエスは、彼に言われた。「やめさせることはありません。あなたがたに反対しない者は、あなたがたの味方です。」

①これは、12弟子の競争心を暴露した出来事である。

②イエスの弟子のひとりが、イエスの御名によって悪霊の追い出しをしていた。

＊弟子集団の端にいた者であろう。

＊あるいは、バプテスマのヨハネの弟子であった可能性もある。

- ③12使徒たちは、自分たち以外の者がイエスの御名を唱えることに反対した。
- ④イエスは、「あなたがたに反対しない者は、あなたがたの味方です」と言われた。
- ⑤エペソでのエピソードは、これとは根本的に異なる。
- ⑥エペソで主イエスの御名を唱えたのは、不信者たちである。

(4)「そういうことをしたのは、ユダヤの祭司長スケワという人の七人の息子たちであつた」

- ①スケワは「自称祭司長」であつて、本物でない。
 - *「祭司長」と名乗る方が権威付けになったのであろう。
 - *魔術を行っていたので、エルサレムから追放された可能性がある。
 - *アジア州を巡る旅で、エペソに来たのであろう。
- ②彼らは、悪霊につかれた人の家に行き、ためしに、主イエスの御名によって悪霊を追い出そうとした。
- ③「パウロの宣べ伝えているイエスによって、おまえたちに命じる」と言った。

II. 悪霊の逆襲（15～16 節）

1. 15～16 節

Act 19:15 すると悪霊が答えて、「自分はイエスを知っているし、パウロもよく知っている。けれどおまえたちは何者だ」と言った。

Act 19:16 そして悪霊につかれている人は、彼らに飛びかかり、ふたりの者を押さえつけて、みなを打ち負かしたので、彼らは裸にされ、傷を負ってその家を逃げ出した。

- (1) 悪霊から答があつた。
 - ①「悪霊につかれている者」は、実際に悪霊につかれていた。
 - ②悪霊は知的活動をしている。
- (2) イエスとパウロは、「the Jesus」と「the Paul」である。
 - ①お前が口にしているイエスとパウロという意味がある。
 - ②ここでルカは、2つの動詞を使い分けている。
 - ③イエスに関して「知っている」は、ギノスコウという動詞である。
 - *これは、体験的知識である。
 - ④パウロに関して「知っている」は、エピスタマイという動詞である。
 - *これは、理解している、聞き及んでいるという意味での知識である。
 - ⑤（口語訳）

Act 19:15 すると悪霊がこれに対して言った、「イエスなら自分は知っている。パウロもわか

っている。だが、おまえたちは、いったい何者だ」。

(3) 「けれどおまえたちは何者だ」

- ① 「おまえたち」という言葉に強調点がある。
- ② 悪霊は、スケアの7人の息子たちを見下している。
- ③ 名前を聞いているのではなく、「何様だと思っているのだ」という意味である。

(4) 「ふたりの者を押さえつけて、みなを打ち負かしたので、」

- ① 「皆を押さえつけ、打ち負かしたので、」（新改訳2017）
- ② 「アンフォテロン」という言葉は、「ふたり」とも「皆」とも訳せる。
- ③ 「生兵法は大怪我の基」ということわざ通りのことが起った。
 - * 悪霊につかれた人は、超自然的な力を発揮し、反撃した。
 - * 7人の悪霊追い出し人は、裸にされ、傷を負ってその家を逃げ出した。
 - * 命が助かっただけでも、まだましである。

Ⅲ. このエピソードの結末（17～20節）

1. 17節

Act 19:17 このことがエペソに住むユダヤ人とギリシヤ人の全部に知れ渡ったので、みな恐れを感じて、主イエスの御名をあがめるようになった。

- (1) この出来事は、エペソに住むユダヤ人とギリシア人の全部に知れ渡った。
 - ① 神への畏怖の念が湧いてきた。
 - ② 主イエスの御名があがめられた。
 - ③ 当然、多くの者が信仰に入った。

2. 18～19節

Act 19:18 そして、信仰に入った人たちの中から多くの者がやって来て、自分たちのしていることをさらけ出して告白した。

Act 19:19 また魔術を行っていた多くの者が、その書物をかかえて来て、みなの前で焼き捨てた。その値段を合計してみると、銀貨五万枚になった。

- (1) 信者の中から多くの者が、罪の告白をした。
 - ① エペソでは、信仰に入ってから悪習慣との決別が出来ていなかった。
 - ② 多くの者たちが、黒魔術やオカルトに関わっていたことを白日の下にさらした。
 - ③ この現象は、魔術と深い係わりのあったエペソならではのものである。
 - ④ 魔術の世界の常識は、「呪文は秘密にしておかなければ効果がなくなる」である。

⑤秘密の呪文や呪縛の言葉を手に入れるために、多額の費用を払って、パピルス製の巻き物や書物を買った。

(2) 秘密の呪文を公にしたとたんに、それらの呪文は効力を失う。

①効力がなくなった巻き物や書物を所有していても意味がない。

②多くの者は、それを群衆が見守る中で焼き捨てた。

③焼き捨てた書物の価値は、銀貨 5 万枚にも及んだ。

④ローマのデナリ銀貨ではなくギリシアのドラクマ銀貨であろう。

*銀貨 5 万枚は、5 万日の労賃に相当する。

*1 ドラクマを現在の 1 万円と考えると、5 万ドラクマは 5 億円に相当する。

3. 20 節

Act 19:20 こうして、主のことばは驚くほど広まり、ますます力強くなって行った。

(1) これは第 6 番目の教会成長レポートである。

①使 2 : 47、6 : 7、9 : 31、12 : 24、16 : 5

②使 16 : 5 は、マケドニア人の幻の箇所である。

*そこから使 19 : 20 のエペソでの奉仕までがひとくくりになっている。

結論：

1. パウロの悪霊との対決

*ルカは、パウロの悪霊との対決を 3 回記録している。

(1) 使 13 : 6～12 第一次伝道旅行において、キプロス島を訪問した。

①偽預言者でバル・イエスというユダヤ人の魔術師に出会った。

*彼は、魔術師エルマとも呼ばれた。

②魔術師エルマは、地方総督セルギオ・パウロを信仰の道から遠ざけようとした。

③パウロが彼を叱責すると、彼の目が見えなくなった。

④驚嘆した総督は、信仰に入った。

(2) 使 16 : 16～18 第二次伝道旅行において、ピリピを訪問した。

①占いの霊につかれた若い女奴隷の妨害を受けた。

②それが幾日も続いたので、パウロは彼女から悪霊を追い出した。

③彼女の主人たちから訴えられたパウロは、投獄された。

④そのことが、看守一家の救いにつながった。

(3) 使 19 : 13~20 第三次伝道旅行において、エペソを訪問した。

①パウロの奇跡をコピーしようとする者たちが現れた。

(4) まとめ

①3回の伝道旅行それぞれにおいて、悪霊との対決があった。

②パウロは、悪霊との戦いを前面に押し出して伝道しているわけではない。

③悪霊から先制攻撃があり、それに対応している。

④最後は、イエス・キリストが勝利される。

2. 罪や悪習慣との決別

(1) クリスマンになっても、古いものを捨てきれないことがよくある。

①エペソでは、魔術やオカルトの世界から救われた人たちが多くいた。

②彼らは、かつての悪習慣から抜け出せないでいた。

③この世（エペソ）の価値観に沿って生きていたのである。

④スケアの7人の息子たちのエピソードをきっかけに、彼らは古い生活と決別する決心をした。

(2) 私たちへの適用

①男女関係や性道徳はどうか。

②偶像礼拝や占いはどうか。

③拝金主義はどうか。

④交友関係はどうか。

（ILL）断捨離。「友人」も断捨離の対象にできる。

「思い切って友人を断捨離して新しい人生を始めましょう」

⑤ロマ 13 : 12

Rom 13:12 夜はふけて、昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。

Rom 13:13 遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみの生活ではなく、昼間らしい、正しい生き方をしようではありませんか。

Rom 13:14 主イエス・キリストを着なさい。肉の欲のために心を用いてはいけません。

「エルサレムを目差すパウロ」

使徒 19 : 21～22

1. はじめに

(1) 第三次伝道旅行が始まった。

①使 18 : 23～21 : 17（紀元 53 年の春から 56 年の春）

②第三次伝道旅行の中心地は、エペソである。

＊ルカは、自由人としてのパウロの伝道活動の集大成を記している。

＊パウロは、約 3 年の間エペソに留まった。

＊教会史におけるエペソ伝道の重要性を見落としてはならない。

③いよいよエペソでの伝道が終わりに近づいてきた。

④この箇所から、新しい区分が始まる。

(2) 使徒の働きの 7 区分

①7 つの教会成長レポートで記述が区切られている。

②使 2 : 47、6 : 7、9 : 31、12 : 24、16 : 5、19 : 20

③第 7 番目は、使 28 : 30～31 である。

Act 28:30 こうしてパウロは満二年の間、自費で借りた家に住み、たずねて来る人たちをみな迎えて、

Act 28:31 大胆に、少しも妨げられることなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。

(3) 第 7 番目の区分：ローマに至る教会の広がり（使 19 : 21～28 : 31）

①復活のイエス・キリストが、御自身の教会を建てておられる。

②使徒たちは、イエス・キリストに用いられる器である。

③使 19 : 21～22 は、第 7 の区分の目次のような役割を果たしている。

④第 7 の区分の結論が、使 28 : 30～31 である。

⑤使徒の働きは、そこで終わる。

(4) 第 7 の区分の特徴

①使徒の働き全体のおよそ 3 分の 1 を占める。

＊神学的重要性のゆえに、長いのではない。

＊ルカがこれだけのスペースを割いている理由を考える必要がある。

②パウロの弁明に多くのスペースが割かれている。

＊合計 5 回の弁明が記録されている。

*これは、パウロの無罪性を証明する資料となる。

③「私たち章句」（'We' section）が多い。

*20：5～15、21：1～18、27：1～28：16

*これは目撃者情報であり、やはりパウロの無罪性を証明する資料となる。

*目撃者情報は、詳細な記録として残る（使16：11～40のピリピ伝道）。

(5) この段階で、パウロはエルサレム、そしてローマに目を向け始める。

①ローマの先には、スペインがある。

②ルカはスペインには触れていない。

③彼の執筆目的は、福音がローマに伝わるまで扱うことである。

(6) エルサレムを目差すパウロ（21～22節）

①エルサレムに上る計画（21節）

②その前にすべき優先事項（22節）

結論：2つの対比

(1) ルカの福音書と使徒の働きとの対比

①中心地に関する対比

②エンディングに関する対比

③私たちへの教訓

(2) パウロの計画と神の計画の対比

①ローマに向うことに関して

②ローマに着く方法に関して

③私たちへの教訓

エルサレムに上るというパウロの決意について学ぶ。

I. エルサレムに上る計画（21節）

1. 21節

Act 19:21 これらのことが一段落すると、パウロは御霊の示しにより、マケドニアとアカヤを通ったあとでエルサレムに行くことにした。そして、「私はそこに行ってから、ローマも見なければならぬ」と言った。

(1) 「これらのことが一段落すると、」

①「これらのことがあった後、」（新改訳2017）

②スケワの7人の息子たちの事件と、それに続くエピソードがあった後

(2)「パウロは御霊の示しにより、」

- ①パウロの伝道を導いているのは、聖霊である。
- ②聖霊の導きにより、パウロの伝道は次のステージに進む。
- ③パウロ自身の認識もあった。

＊アジア州では、働き場がなくなって来た。

＊マケドニアとアカヤの諸教会も、成長している。

- ④パウロは、第四次伝道旅行を心に思い描いた。

＊彼の心には、種々の短期計画があった。

＊長期計画は、ローマに向うことである。さらに、スペインへ。

(3) ロマ書は第三次伝道旅行の終り頃、コリント滞在中（使 20：2～3）に書かれた。

＊エルサレムに諸教会の献金を届ける直前

- ①ロマ 1：15

Rom 1:15 ですから、私としては、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を伝えたいのです。

- ②ロマ 15：22

Rom 15:22 そういうわけで、私は、あなたがたのところに行くのを幾度も妨げられましたが、

Rom 15:23 今は、もうこの地方には私の働くべき所がなくなりましたし、また、イスパニヤに行く場合は、あなたがたのところへ立ち寄ることを多年希望していましたので

Rom 15:24 ——というのは、途中あなたがたに会い、まず、しばらくの間あなたがたとともにいて心を満たされてから、あなたがたに送られ、そこへ行きたいと望んでいるからです、——

Rom 15:25 ですが、今は、聖徒たちに奉仕するためにエルサレムへ行こうとしています。

(4)「マケドニアとアカヤを通ったあとでエルサレムに行くことにした」

- ①彼は、マケドニアとアカヤの諸教会で、フォローアップの奉仕をしようとした。
- ②また、経済的に余裕のある諸教会から献金を集めようとした。
- ③エルサレムの貧しい聖徒たちを援助するためであった。

II. その前に為すべき優先事項（22 節）

1. 22 節

Act 19:22 そこで、自分に仕えている者の中からテモテとエラストのふたりをマケドニアに送り出したが、パウロ自身は、なおしばらくアジアにとどまっていた。

- (1) ローマに向う前に、優先させるべき奉仕があった。

①マケドニアでの奉仕

＊ピリピ、ベレア

＊テサロニケには戻れない（17：9）。

②アカヤでの奉仕

＊特にコリント

③エルサレムでの奉仕

(2) 自分が訪問するための準備として、ふたりの同労者を先にマケドニアに派遣した。

①献金を集める準備をさせる。

②テモテ

＊彼が最後に現れたのはコリントであった（18：5）。

＊ここで再び登場する。

③エラスト

＊ロマ 16：23

Rom 16:23 私と全教会との家主であるガイオも、あなたがたによろしくと言っています。市の収入役であるエラストと兄弟クワルトもよろしくと言っています。

＊コリントの町の収入役、裕福な信者。

＊彼の名前が、コリントの遺跡から発掘されている。

＊彼は、石の広場の建設のために献金した。

(3) 「パウロ自身は、なおしばらくアジアにとどまっていた」

①パウロは、もう少しアジアに留まり、働きを続けようとした。

②パウロは、この時期にコリント人への手紙第一を書いた。

＊1 コリ 16：8～9

1Co 16:8 しかし、五旬節まではエペソに滞在するつもりです。

1Co 16:9 というのは、働きのための広い門が私のために開かれており、反対者も大ぜいいるからです。

②しかし、エペソで暴動が起り、町を出ることになる。

結論：

1. ルカの福音書と使徒の働きの対比

(1) 中心地に関する対比

①ルカの福音書では、エルサレムが中心地である。

＊イエス・キリストは、エルサレムで死に、埋葬され、復活された。

②使徒の働きでは、ローマが中心地である。

＊福音は、エルサレムからローマに伝わった。

＊イエス・キリストは、ローマ帝国の首都に御自身の教会を設立された。

(2) エンディングに関する対比

①ルカの福音書では、イエスの受難物語が詳細に記録されている。

＊特に、最後の1週間が詳細に記録されている。

＊ルカの福音書は、イエスの死ではなく、復活で終わっている。

②使徒の働きでは、パウロの「受難」が詳細に記録されている。

＊使徒の働きは、パウロの死でなく、新しい生活で終わっている。

③ペテロの「受難」に関しても、同じことが言える。

＊ペテロが解放されたところで、彼の「受難」物語が終わっている。

④ここに、イエス・キリストの復活との対比がある。

(3) 私たちへの教訓

①人生は死で終わるのではない。復活の命がある。

2. パウロの計画と神の計画の対比

(1) ローマに向うことに関して

①神の御心は、パウロがローマに行き、そこで宣教することである。

②パウロの願いも、ローマで宣教することである。

(2) ローマに着く方法に関して

①パウロが予想したものとは違っている。

②神の主権は、人間の願いを超越したものである。

③最後は、神の御心が成る。

④暴動が起り、予定よりも早くエペソを出ることになったのは、その例である。

⑤彼は、エルサレムに帰還することは危険であることを認識していた。

⑥それでも、彼はエルサレムに上ることをいとわなかった。

(4) 私たちへの教訓

①ルカ 8:22 (ゲラサ人の地)

Luk 8:22 そのころのある日のこと、イエスは弟子たちといっしょに舟に乗り、「さあ、湖の向こう岸へ渡ろう」と言われた。それで弟子たちは舟を出した。

②イエスが「向こう岸へ渡ろう」と言われたなら、必ず行ける。

- ③パウロの究極的長期計画は、主とともにいることである。
- ④より具体的には、千年王国（御国）に住むことである。
- ⑤千年王国は、将来成就する御国である。

「エペソでの騒動」

使徒 19：23～41

1. はじめに

(1) 使徒の働きの 7 区分

- ①7つの教会成長レポートで記述が区切られている。
- ②第7番目の区分：ローマに至る教会の広がり（使 19：21～28：31）
- ③地図表示

(2) パウロは、予定よりも早くエペソを出ることになる。

- ①その理由は、予期せぬ暴動事件である。
- ②これまでの迫害は、ユダヤ人からのものが主であった。
- ③ここでは、異邦人からの迫害が起る。
 - *ピリピでは、女奴隷の主人たちからの迫害があった（使 16：19）。
 - *異邦人からの迫害は、経済的理由によるものである。
- ④パウロの無罪性を証明するために、ルカは詳細にこの事件を記録している。
- ⑤キリスト教がローマ帝国の公認宗教であることを確認させるためでもある。

(3) エペソについての復習

- ①エペソは、アジアとヨーロッパを結ぶ重要な港町であった。
- ②前 1044 年に建設された古代からある商業都市である。
- ③前 4 世紀以降、ギリシア風都市となった（アレキサンダー大王と後継者たち）。
- ④前 2 世紀の終わりに、ローマが支配する都市となった。
- ⑤大いに栄えた商業都市で、当然のことながらアジア州の首都となった。
 - *パウロの時代、商業都市としては最盛期を過ぎていた。
 - *カイストロス川の土砂が、港に堆積し始めた。
- ⑥ユダヤ人にも寛容だったので、多くのユダヤ人が住んでいた。
- ⑦世界の七不思議のひとつアルテミス神殿があった。

*写真①と②

*66m×130m（127本の柱）。アテネのパルテノン神殿の4倍もある。

*アレキサンダー大王が資金援助をした。

- ⑧アルテミスは、多数の乳房を持った豊穡の女神である。

*写真③表示

- ⑨エペソは、アジアにおける偶像礼拝と売春の中心地であった。

*地域経済も、アルテミス信仰によって潤っていた。

- ⑩ここでパウロは、約3年にわたって伝道を継続し、生涯で最大の成果を上げた。
- ⑪黙2章に出て来る「七つの教会」は、この期間に設立されたものである。

(4) エペソでの騒動

- ①銀細工人デメテリオ（23～28節）
- ②パウロ（29～31節）
- ③ユダヤ人アレキサンデル（32～34節）
- ④町の書記役（35～41節）

結論：迫害と神の守り

- (1) 迫害が持つメッセージ
- (2) 神の守りが持つメッセージ

エペソでの騒動について学ぶ。

I. 銀細工人デメテリオ（23～27節）

1. 23節

Act 19:23 そのころ、この道のことから、ただならぬ騒動が持ち上がった。

- (1) パウロがエペソを出ようとする前に、暴動が起った。
 - ①「ただならぬ騒動」（新改訳）、「大変な騒ぎ」（2017）、「no small disturbance」
 - ②これは、パウロの伝道がいかに大きな影響を与えていたかを示す騒動である。

(2) 「この道のことから」

- ①「この道のことで」（新改訳2017）。「この道」とは、キリスト教のことである。
- ②イエスの弟子たちは、「この道の者」と呼ばれた。
- ③使9:2

Act 9:2 ダマスコの諸会堂あての手紙を書いてくれるよう頼んだ。それは、この道の者であれば男でも女でも、見つけ次第縛り上げてエルサレムに引いて来るためであった。

- ④エルサレム教会からエペソの教会まで、一貫した流れがある。
 - *イエス・キリストに関する共通理解があった。
 - *同じ信仰の共同体に属しているという認識（普遍的教会）があった。
 - *使徒たちの教えを神のことばとして認識していた。
- ⑤パウロ個人にではなく、福音の影響力に対して騒動が起った。
- ⑥福音には社会を変革する力があるので、それを阻止しようとする力が働く。

2. 24～25 節 a

Act 19:24 それというのは、デメテリオという銀細工人がいて、銀でアルテミス神殿の模型を作り、職人たちにかかなりの収入を得させていたが、

Act 19:25a 彼が、その職人たちや、同業の者たちをも集めて、こう言ったからである。

(1) ローマ世界の異邦人が礼拝してた女神には、2 種類のものがあった。

＊呼び名は、アルテミス（ギリシア語）、あるいはディアナ（ラテン語）。

①ひとつは、狩猟の女神である（弓を持った娘として描かれる）。

②もうひとつは、豊穡の女神である（多くの乳房を持った婦人として描かれる）。

(2) エペソで礼拝されていたのは、②の豊穡の女神である。

①エペソのアルテミスは、安産の女神だと主張する学者もいる。

②エペソのアルテミス礼拝は、ヨーロッパ的なものではなく、アジア的なもの。

③当時、アルテミス礼拝は少なくとも 33 箇所で行われていた。

④その中心が、エペソである。

(3) アルテミス神殿

①当時の世界七不思議のひとつであった。

②歴史上建設された建物の中で、最も美しいものの一つだと認める歴史家が多い。

＊収容人数は、約 25,000 人。

③神殿の機能

＊礼拝、不道德な儀式、銀行（アジアの財宝が貯蔵されていた）

④中央に祀られているご神体は、隕石だった。

＊天から降って来た石が、聖なるものとされることはよくあった。

＊この石の形が複数の乳房を持った婦人の姿に似ていた。

(4) 銀細工人デメテリオは、銀で女神像や神殿模型を作り、土産物としていた。

①しかし、その商売が傾き始めた。

②そこで彼は、職人たちや同業者たちを集めて、この傾向を阻止しようとした。

3. 25b～27 節

Act 19:25b 「皆さん。ご承知のように、私たちが繁盛しているのは、この仕事のおかげです。

Act 19:26 ところが、皆さんが見てもいるし聞いてもいるように、あのパウロが、手で作った物など神ではないと言って、エペソばかりか、ほとんどアジア全体にわたって、大ぜいの人々を説き伏せ、迷わせているのです。

Act 19:27 これでは、私たちのこの仕事も信用を失う危険があるばかりか、大女神アルテミ

スの神殿も顧みられなくなり、全アジア、全世界の拝むこの大女神のご威光も地に落ちてしま
いそうです。」

(1) デメテリオの演説から、パウロのメッセージの内容とその影響力が分かる。

- ①「手で作った物など神ではない」
- ②「エペソばかりか、ほとんどアジア全体にわたって、大ぜいの人々を説き伏せ、
迷わせている」

(2) デメテリオの怒りは、信仰心からではなく、経済的理由から来ている。

- ①彼の演説の中には、面子を重んじるアジア文化の特徴が見られる。
- ②自分たちは、信用を失う恐れがある。
- ③大女神の威光が地に落ちる恐れがある。「the Great Mother」

Ⅱ. パウロ (28～31 節)

1. 28～29 節

Act 19:28 そう聞いて、彼らは大いに怒り、「偉大なのはエペソ人のアルテミスだ」と叫び始
めた。

Act 19:29 そして、町中が大騒ぎになり、人々はパウロの同行者であるマケドニア人ガイオ
とアリスタルコを捕らえ、一団となって劇場へなだれ込んだ。

(1) 大騒ぎになった理由

- ①エペソの経済自体が不景気になっていたのも、人々は煽動され易かった。
- ②アルテミス神殿は、エペソ市民の誇りであった。
- ③暴動を起している者たちは、何が問題なのかも知らないで騒いでいた。
- ④パウロの同行者、マケドニア人ガイオとアリスタルコが捕らえられた。

＊アリスタルコは、テサロニケ出身である（使 20：4）。

(2) 煽動者たちは、アルカディア通りから劇場に暴徒たちを導いた。

- ①アルカディア通りと劇場の遺跡が発掘されている。

＊アジアで最大の劇場（半円形、5 万人収容）

2. 30～31 節

Act 19:30 パウロは、その集団の中に入って行こうとしたが、弟子たちがそうさせなかった。

Act 19:31 アジア州の高官で、パウロの友人である人たちも、彼に使いを送って、劇場に入
らないように頼んだ。

(1) パウロは、どこか別の所にいたので、捕らえられなかった。

- ①パウロは、同労者を救い、この機会を伝道に用いようとした。
- ②危険を察知した信者たちは、パウロが暴徒の中に入ることを許さなかった。

(2) 「アジャ州の高官」

- ①ギリシア語で「アジャーケイス」である。
- ②英語で、「some of the officials of the province」
- ③この職責は、町の政治と宗教を管理するために設けられていた。
- ④複数の高官たちは、パウロの友人であった。
- ⑤彼らも、パウロが劇場に入らないように懇願した。
- ⑥アジャ州の高官たちが友人だという情報は、裁判資料になる。

Ⅲ. ユダヤ人アレキサンデル（32～34 節）

1. 32 節

Act 19:32 ところで、集会は混乱状態に陥り、大多数の者は、なぜ集まったのかさえ知らなかったもので、ある者はこのことを叫び、ほかの者は別のことを叫んでいた。

(1) 「集会」

- ①「エクレシア」というギリシア語であるが、教会のことではない。
- ②民衆から「呼び出された人たち」である。
- ③暴徒たちは、騒ぐことが好きで、騒いでいる人たちである。

2. 33～34 節

Act 19:33 ユダヤ人たちがアレキサンデルという者を前に押し出したので、群衆の中のある人たちが彼を促すと、彼は手を振って、会衆に弁明しようとした。

Act 19:34 しかし、彼がユダヤ人だとわかると、みなの方がいっせいに声をあげ、「偉大なのはエペソ人のアルテミスだ」と二時間ばかりも叫び続けた。

(1) アレキサンデルは、ユダヤ人の指導者である。

- ①彼は、イエスを信じないユダヤ人共同体の代表として前に立った。
- ②自分たちユダヤ人は、パウロと無関係であると言おうとした。

(2) しかし、彼がユダヤ人だと分かると、群衆は大声で叫び続けた。

- ①キリスト教とユダヤ教の区別がついていない。
- ②反ユダヤ主義が蔓延していた。
- ③アルテミス信仰への誇りがあった。

IV. 町の書記役（35～41 節）

1. 35～36 節

Act 19:35 町の書記役は、群衆を押し静めてこう言った。「エペソの皆さん。エペソの町が、大女神アルテミスと天から下ったそのご神体との守護者であることを知らない者が、いったいいるのでしょうか。

Act 19:36 これは否定できない事実ですから、皆さんは静かにして、軽はずみなことをしないようにしなければいけません。

(1) 「町の書記役」による説得

- ①選挙で選ばれた行政官。現代の市長である。
- ②彼は、暴動を鎮めるために、4つのポイントで暴徒たちを説得しようとした。

(2) 第1のポイント

- ①なんの心配もない。

*エペソの町が大女神アルテミスと天から下ったそのご神体との守護者であることを知らない者はいない。

2. 37～41 節

Act 19:37 皆さんがここに引き連れて来たこの人たちは、宮を汚した者でもなく、私たちの女神をそしった者でもないのです。

Act 19:38 それで、もしデメテリオとその仲間の職人たちが、だれかに文句があるのなら、裁判の日があるし、地方総督たちもいることですから、互いに訴え出たらよいのです。

Act 19:39 もしあなたがたに、これ以上何か要求することがあるなら、正式の議会で決めてもらわなければいけません。

Act 19:40 きょうの事件については、正当な理由がないのですから、騒擾罪に問われる恐れがあります。その点に関しては、私たちはこの騒動の弁護はできません。」

Act 19:41 こう言って、その集まりを解散させた。

(1) 第2～第4のポイント

- ②ガイオとアリストアルコスは、破壊的なことは何もしていない。
- ③デメテリオと職人仲間に不満があるなら、正式な裁判で争えばよい。
*地方総督による裁判は、月に3度行われていた。
- ④正当な理由のない騒動は、騒擾罪に問われる危険性がある。

(2) この説得は、功を奏した。

- ①町の書記役による説得も、裁判資料になる。

結論：迫害と神の守り

1. 迫害が持つメッセージ

(1) アクラとプリスキラ夫婦の苦難

①ロマ 16：3

Rom 16:3 キリスト・イエスにあって私の同労者であるプリスカとアクラによろしく伝えてください。

Rom 16:4 この人たちは、自分のいのちの危険を冒して私のいのちを守ってくれたのです。この人たちには、私だけでなく、異邦人のすべての教会も感謝しています。

(2) パウロの苦難

①1 コリ 15：32

1Co 15:32 もし、私が人間的な動機から、エペソで獣と戦ったのなら、何の益があるでしょう。もし、死者の復活がないのなら、「あすは死ぬのだ。さあ、飲み食いしようではないか」ということになるのです。

②2 コリ 1：8～10

2Co 1:8 兄弟たちよ。私たちがアジアで会った苦しみについて、ぜひ知っておいてください。

私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、ついにいのちさえも危くなり、

2Co 1:9 ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。

2Co 1:10 ところが神は、これほどの大きな死の危険から、私たちを救い出してくださいました。また将来も救い出してくださいます。なおも救い出してくださるという望みを、私たちはこの神に置いているのです。

(3) 苦難は、私たちの信仰を強め、私たちを次の段階へと導く神の使いである。

2. 神の守りが持つメッセージ

(1) 神の守り

①パウロの友人たち

②アジア州の高官たち

③町の書記役

(2) 神の守りを確信することは、次の目標に向かって進むための力となる。

①ピリ 1：21

Php 1:21 私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です。

*生きることは、キリストの栄光のためである。

*死ぬことも、キリストの栄光のためである。

（ILL）2005 年 グッシュ・カティフの住民たちは強制退去を命じられた。
現在、エジプト国境に近いネゲブ砂漠にハルツァを建設。
人口 2,000 人。18 歳以下 70 パーセント。
10 年後、人口 15,000 人になるという予想。

「マケドニアとアカヤ再訪」

使徒 20 : 1～6

1. はじめに

(1) この段階でのパウロの自己認識

- ①まだ余力はあるが、決して若くはない。
- ②これまでの奉仕を締めくくる必要がある。
*各教会に分かれを告げる必要がある。
- ③残された仕事に着手する必要がある。

(2) パウロは、予定よりも早くエペソを出ることになった。

- ①予期せぬ暴動事件が勃発した。
- ②この箇所は、パウロの旅程の記録である。
- ③教会教父たちは、この箇所の重要性を認めていない（注解が残っていない）。
- ④講解メッセージには、苦しみと喜びがある。

(3) アウトライン：マケドニアとアカヤ再訪

- ①エペソからトロアスへ（1 節）
- ②トロアスからピリピへ（1 節）
- ③ピリピからコリントへ（2～3 節 a）
- ④コリントからピリピへ（3 節 b）
- ⑤ピリピからトロアスへ（4～6 節）

結論：

- (1) これまでの奉仕の締めくくりをする。
 - ①諸教会に別れを告げる。
 - ②コリント人への手紙第二を執筆する。
- (2) 残された仕事に着手する。
 - ①異邦人信者の献金をエルサレム教会に届ける。
 - ②ローマ人への手紙を執筆する。

マケドニアとアカヤ再訪から霊的教訓を学ぶ。

I. エペソからトロアスへ（1 節）

1. 1 節

Act 20:1 騒ぎが治まると、パウロは弟子たちを呼び集めて励まし、別れを告げて、マケドニアへ向かって出発した。

(1) エペソでの騒動が治まって以降のパウロの動き

①彼は、マケドニア、アカヤを経由してエルサレムに向おうとした。

②使 19 : 21

Act 19:21 これらのことが一段落すると、パウロは御霊の示しにより、マケドニアとアカヤを通ったあとでエルサレムに行くことにした。そして、「私はそこに行ってから、ローマも見なければならぬ」と言った。

③「励まし」「embrace」「アスパズマイ」は、幅広い意味を持つ言葉である。

④叱責、警告、矯正、励まし

(2) 彼は、エペソを出て、トロアスに向った。

①トロアスは、かつてパウロがマケドニア人の幻を見た港町である。

②2 コリ 2 : 12～13

2Co 2:12 私が、キリストの福音のためにトロアスに行ったとき、主は私のために門を開いてくださいましたが、

2Co 2:13 兄弟テトスに会えなかったので、心に安らぎがなく、そこの人々に別れを告げて、マケドニアへ向かいました。

*トロアスでは、伝道の機会が与えられていた。

*しかしパウロは、すぐにマケドニア（ピリピ）に向った。

*コリント教会のことが気がかりであった。

*パウロは、厳しい手紙とともにテトスを先に派遣していた。

*そのテトスとトロアスで落ち合う予定であったが、会えなかった。

*コリント教会の様子を知りたかったが、それが叶わなかった。

*そこで、トロアスでの滞在を短時間で切り上げ、ピリピに向った。

*ルカは、トロアスを省いて、すぐにマケドニアに向ったと書いている。

Ⅱ. トロアスからピリピへ (1 節)

1. 1 節

Act 20:1 騒ぎが治まると、パウロは弟子たちを呼び集めて励まし、別れを告げて、マケドニアへ向かって出発した。

(1) パウロは、マケドニアでテトスに会えた。

①2 コリ 7 : 5～8

2Co 7:5 マケドニアに着いたとき、私たちの身には少しの安らぎもなく、さまざまの苦しみに

会って、外には戦い、うちには恐れがありました。

2Co 7:6 しかし、気落ちした者を慰めてくださる神は、テトスが来たことによって、私たちが慰めてくださいました。

2Co 7:7 ただテトスが来たことばかりでなく、彼があなたがたから受けた慰めによっても、私たちは慰められたのです。あなたがたが私を慕っていること、嘆き悲しんでいること、また私に対して熱意を持っていてくれることを知らされて、私はますます喜びにあふれました。

2Co 7:8 あの手紙によってあなたがたを悲しませたけれども、私はそれを悔いていません。あの手紙がしばらくの間であったにしろあなたがたを悲しませたのを見て、悔いたけれども、

2Co 7:9 今は喜んでいます。あなたがたが悲しんだからではなく、あなたがたが悲しんで悔い改めたからです。あなたがたは神のみこころに添って悲しんだので、私たちのために何の害も受けなかったのです。

＊テトスは、コリント教会が悔い改めたという知らせをもたらしてくれた。

＊これによって、パウロは大いに慰められた。

＊そこでパウロは、コリント人への手紙第二を書いた。

＊ピリピに滞在している間に執筆したと思われる。

Ⅲ. ピリピからコリントへ (2～3 節 a)

1. 2 節

Act 20:2 そして、その地方を通り、多くの勧めをして兄弟たちを励ましてから、ギリシヤに来た。

(1) この時期に、イルリコ伝道を行ったものと思われる。

①マケドニアの北西の地域（旧ユーゴスラビア）

②ロマ 15 : 19

Rom 15:19 また、しるしと不思議をなす力により、さらにまた、御霊の力によって、それを成し遂げてくださいました。その結果、私はエルサレムから始めて、ずっと回ってイルリコに至るまで、キリストの福音をくまなく伝えました。

(2) ギリシヤに来たとは、コリントに来たという意味である。

2. 3 節 a

Act 20:3a パウロはここで三か月を過ごしたが、

(1) コリントに3ヶ月間滞在した。

①冬は海が荒れるので、春になるのを待った。

②ロマ 16 : 23

Rom 16:23 私と全教会との家主であるガイオも、あなたがたによろしくと言っています。市の収入役であるエラストと兄弟クワルトもよろしくと言っています。

＊ガイオの家に滞在した。

(2) この時期に、パウロはローマ人への手紙を執筆した。

①エルサレムを訪問した後、ローマ、スペインに行くつもりであった。

②エルサレムを訪問する目的は、異邦人クリスチャンたちの献金を届けるため。

IV. コリントからピリピへ（3節b～4節）

1. 3節b

Act 20:3b そこからシリアに向けて船出しようというときに、彼に対するユダヤ人の陰謀があったため、彼はマケドニアを経て帰ることにした。

(1) パウロは、コリントからシリアに向う船に乗ろうとしていた。

①ケンクレアの港からカイザリヤに向う船便

②カイザリヤからエルサレム（春の祭りを祝おうとしていた）

＊過越の祭りと種なしパンの祭り（合計8日間）

＊多くのユダヤ人が集まるので、伝道のチャンスが広がる。

③多くのユダヤ人の巡礼者たちが、その船便を利用していた。

(2) 彼は、ユダヤ人の陰謀についての情報を得た。

①どのようにして知ったかは、書かれていないが、明らかに神の守りがある。

②熱狂的なユダヤ人たちにとって、船上でパウロを殺すのは容易なことであった。

③パウロは計画を変更し、マケドニア経由でエルサレムに向うことにした。

④当然、過越の祭りには間に合わない。次の祭りは、ペンテコステである。

2. 4～5節

Act 20:4 プロの子であるベレヤ人ソパテロ、テサロニケ人アリストアルコとセクンド、デルベ人ガイオ、テモテ、アジア人テキコとトロピモは、パウロに同行していたが、

Act 20:5 彼らは先発して、トロアスで私たちを待っていた。

(1) 7名の同行者たち

①3名がマケドニアから

＊プロの子であるベレヤ人ソパテロ

＊テサロニケ人アリストアルコとセクンド

②4名が小アジアから

- *デルベ人ガイオ
- *テモテ（ルステラ）
- *アジア人テキコとトロピモ

(2) 彼らは、先発してトロアスでパウロの一行を待った。

①彼らに対する陰謀がないので、ケンクレアからトロアスに直行できた。

V. ピリピからトロアスへ（6節）

1. 6節

Act 20:6 種なしパンの祝いが過ぎてから、私たちはピリピから船出し、五日かかってトロアスで彼らと落ち合い、そこに七日間滞在した。

(1) パウロの一行は、ピリピで種なしパンの祭りを祝った。

- ①「私たち章句」が始まる。
- ②ルカがピリピで合流した。
- ③ルカは、ピリピ教会の代表である。
- ④「私たち章句」は、使 20：5～15、21：1～18 と続く。

(2) 一行は、ネアポリス（ピリピの港町）から船に乗り、トロアスに向った。

①以前は、2日間しかかからなかった（使 16：11）が、今回は5日かかった。

(3) トロアスで同行者たちに合流し、そこで7日間滞在した。

①パウロは、トロアスの教会で奉仕をする（次回の内容）。

結論：

1. これまでの奉仕の締めくくり

(1) 諸教会に別れを告げる。

①自分が設立した諸教会を訪問し、信者たちを励ました。

(2) コリント人への手紙第二を執筆する（ピリピ滞在中）。

①特徴

- *地域教会が直面する課題について書かれた書簡である。
- *コリント人への手紙第一では、パウロは教師である。
- *コリント人への手紙第二では、パウロは牧会者である。

- *皮肉的な言葉が多いが、その判断が難しい。
- *個人的な感情を伝える言葉が多い。

②執筆目的

- *コリント訪問の計画を変更した理由
- *懲戒を正しく実行したことへの褒め言葉
- *パウロの動機を疑う者たちへの応答
- *エルサレムの聖徒たちへの献金
- *パウロの使徒職を疑う者たちへの応答

2. 残された仕事に着手

(1) 異邦人信者の献金をエルサレム教会に届ける。

①ロマ 15 : 25～27

Rom 15:25 ですが、今は、聖徒たちに奉仕するためにエルサレムへ行こうとしています。

Rom 15:26 それは、マケドニアとアカヤでは、喜んでエルサレムの聖徒たちの中の貧しい人たちのために献金することにしたからです。

Rom 15:27 彼らは確かに喜んでそれをしたのですが、同時にまた、その人々に対してはその義務があるのです。異邦人は霊的なことでは、その人々からもらいものをしたのですから、物質的な物をもって彼らに奉仕すべきです。

(2) ローマ人への手紙を執筆する（コリント滞在中）。

①特徴

- *第三次伝道旅行の終りごろ、コリント滞在中に執筆された。
- *エルサレムに諸教会の献金を届ける直前に書かれた。
- *第3次伝道旅行はエルサレムで終わる。
- *そこで投獄され、ローマに送られる。
- *紀元 60 年にローマに到着（使 28 : 11～15）。

②執筆目的

- *自らの神学をまとめるため。
- *スペイン伝道の支援を求めるため。
- *ローマ教会にあったユダヤ人信者と異邦人信者の葛藤を解決するため。
- *最初の組織神学の手紙である。

「トロアス教会の集会」

使徒 20：7～12

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①パウロは、マケドニアとアカヤを経由してエルサレムに行こうとしている。
- ②コリントの港であるケンクレアからエルサレムに向う船に乗ろうとした。
- ③しかし、パウロに対する陰謀があることを知り、計画を変更した。
- ④コリント→ピリピ→トロアス
- ⑤同行の7名は、先に船でトロアスに着いていた。
- ⑥パウロとルカは、先行していた7名とトロアスで合流した。

(2) 使 20：6

Act 20:6 種なしパンの祝いが過ぎてから、私たちはピリピから船出し、五日かかってトロアスで彼らと落ち合い、そこに七日間滞在した。

- ①パウロは、過越の祭りをピリピで祝った。
- ②パウロは、トロアスに7日間滞在した。
- ③トロアスの教会が誰によって開拓されたかについては情報が無い。
- ④この箇所は、紀元1世紀の教会の様子を知るための助けになる。

(3) パウロのトロアス訪問は、3度ある。

①使 16：8～10

- *マケドニア人の幻を見た（第二次伝道旅行）。
- *滞在は短期間であった。

②2 コリ 2：12～13

- *エペソからトロアスに着いたが、テトスと会えなかった。
- *滞在は短期間で、すぐにピリピに向った。

③使 20：6

- *今回は、7日間滞在した（小集会は毎日開いたと思われる）。
- *7日間滞在した理由は、全体集会で説教するためであろう。

(3) アウトライン：トロアス教会の集会

- ①集会の様子（7～8節）
- ②予期せぬ事故（9節）
- ③予期せぬ祝福（10～12節）

結論：

- (1) 日曜礼拝と私たち
- (2) ユテコの体験と私たち

トロアス教会の集会から霊的教訓を学ぶ。

I. 集会の様子（7～8 節）

1. 7 節

Act 20:7 週の初めの日に、私たちはパンを裂くために集まった。そのときパウロは、翌日出発することになっていたのに、人々と語り合い、夜中まで語り続けた。

(1) 「週の初めの日」

- ①パウロが7日間滞在した理由が明らかになる。
- ②週の初めの日の集会に出席するためである。
- ③これは、今で言うと、土曜日の夜の集会である。
- ④安息日は日没とともに終わった。その後に開かれる集会である。
- ⑤信者の中には奴隷たちもいた。彼らは、日没後でないと出席できない。

(2) 「パンを裂くために集まった」

- ①当時の信者たちは、食事を持ち寄って、ともに食した。
- ②これは最高の交わりの機会であり、「アガペー」（愛餐）と呼ばれた。
 - *「愛餐会」という言葉は、その名残である。
 - *当時は、貧しい奴隷たちは、一日一食の生活をしていた。
- ③愛餐の最後に、聖餐式を行った。
- ④ここには、現代の教会にとってのヒントがある。

(3) 「そのときパウロは、翌日出発することになっていたのに、」

- ①パウロは先を急いでいたので、集会が終わるとすぐに出発するつもりでいた。
- ②つまり、この愛餐はお別れ会でもあった。
- ③パウロは、これが最後だとの自覚があったので、長時間教えた。
 - *午後6時～午前0時までなら、6時間である。
- ④パウロは、エルサレムに顔を向けている。
 - *イエスは、エルサレムで最後の晩餐を食された。
 - *トロアスでの愛餐には、最後の晩餐に似た要素がある。

2. 8 節

Act 20:8 私たちが集まっていた屋上の間には、ともしびがたくさんともしてあった。

(1) 集会は、屋上の間で行われていた。

①3階の大広間に、大ぜいの人たちが詰めかけていた。

②「ともしびがたくさんともしてあった」

＊これは、明かりを採るためのオリーブ油のランプである。

＊酸素を多く消費するので、部屋の中は酸欠状態になった（煙、すす）。

＊また、満席だったので、酸欠状態に拍車をかけた。

II. 予期せぬ事故（9節）

1. 9節

Act 20:9 ユテコというひとりの青年が窓のところに腰を掛けていたが、ひどく眠けがさし、パウロの話が長く続くので、とうとう眠り込んでしまって、三階から下に落ちた。抱き起こしてみると、もう死んでいた。

(1) 「ユテコというひとりの青年が窓のところに腰を掛けていた」

①部屋の換気をよくするために、窓を開け放していた。

②窓のところに座ると、新鮮な空気を吸うことができる。

③特等席であるが、気をつけないと危険である。

④「青年」は、ギリシア語で「ネアニアス」である。

＊8～14歳くらいの男子

＊と同時に、この言葉は「しもべ」とも訳せる。

⑤ユーツウコス（英語で Eutychus）は、典型的な奴隷の名である。

＊恐らく彼は、奴隷だったのだろう。その場合は、30代の男性である。

＊ユテコの意味は、「幸運」である。

⑥もし彼が奴隷なら、一日の労働を終えて、この集会に来ていたことになる。

(2) 「ひどく眠けがさし、パウロの話が長く続くので、とうとう眠り込んでしまって、三階から下に落ちた」

①ユテコが眠り込んだ理由は何か。

＊肉体的に疲れていた（当時は、日没とともに休み、夜明けとともに起きた）。

＊部屋の環境が、眠気を誘うものであった。

＊食後であった。

＊食事の後で始まったパウロの話が長かった。

②ユテコは、3階から下に落ちた。

＊向かい側にいた人たちは、悲鳴を上げたことであろう。

*集会は中断され、人々は急いで階下に降りて行った。

(3) 「抱き起こしてみると、もう死んでいた」

- ①ユテコは、即死であった。
- ②医者 of ルカが証言している。
- ③それ以外の解釈は、成り立たない。

Ⅲ. 予期せぬ祝福（10～12 節）

1. 10 節

Act 20:10 パウロは降りて来て、彼の上に身をかがめ、彼を抱きかかえて、「心配することはない。まだいのちがあります」と言った。

(1) パウロは、多少の責任を感じたことであろう。

- ①彼もすぐに降りて来た。
- ②パウロは、ユテコの上に身をかがめ、彼を抱きかかえた。

(2) 旧約聖書の例

①1 列 17 : 21～22 (エリヤとツァレファテのやもめの息子)

1Ki 17:21 そして、彼は三度、その子の上に身を伏せて、【主】に祈って言った。「私の神、【主】よ。どうか、この子のいのちをこの子のうちに返してください。」

1Ki 17:22 【主】はエリヤの願いを聞かれたので、子どものいのちはその子のうちに返り、その子は生き返った。

②2 列 4 : 32～35 (エリシャとシュネムの女の息子)

2Ki 4:32 エリシャが家に着くと、なんと、その子は死んで、寝台の上に横たわっていた。

2Ki 4:33 エリシャは中に入り、戸をしめて、ふたりだけになって、【主】に祈った。

2Ki 4:34 それから、寝台の上に上がり、その子の上に身を伏せ、自分の口を子どもの口の上に、自分の目を子どもの目の上に、自分の両手を子どもの両手の上に重ねて、子どもの上に身をかがめると、子どものからだが暖かくなってきた。

2Ki 4:35 それから彼は降りて、部屋の中をあら、こちらと歩き回り、また、寝台の上に上がり、子どもの上に身をかがめると、子どもは七回くしゃみをして目を開いた。

(3) ここでは、復活のイエスがパウロを通して奇跡を行われた。

- ①パウロは、「心配することはない。まだいのちがあります」と言った。
- ②「なんぢら騒ぐな、生命はなほ内にあり」（文語訳）
- ③この奇跡によって、パウロの教えの信憑性がなお増した（使徒職の証明）。

④ペテロも似たような奇跡を行っている。

＊使 9：36～42 で、タビタを甦らせている。

2. 11 節

Act 20:11 **そして、また上がって行き、パンを裂いて食べてから、明け方まで長く話し合っ
て、それから出発した。**

(1) 集会が再会された。

①「パンを裂いて」とは、聖餐式を実行したということ。

②「食べてから」とは、食事をしたということ。恐らく夜食であろう。

③さらにパウロは、明け方まで話をした。

＊パウロには、これが最後という思いがあった。

＊人々も、聞く姿勢が正された。

④集会後、パウロはすぐに出発した。

3. 12 節

Act 20:12 **人々は生き返った青年を家に連れて行き、ひとかたならず慰められた。**

(1) ユテコは、無事に帰宅することができた。

①「ひとかたならず慰められた」（新改訳）

②「大いに慰められた」（新共同訳）

③パウロの教えと行いによって、慰められた。

結論：

1. 日曜礼拝と私たち

(1) 使 20：7

Act 20:7 **週の初めの日に、私たちはパンを裂くために集まった。そのときパウロは、翌日出
発することになっていたので、人々と語り合い、夜中まで語り続けた。**

(2) この聖句は、日曜日午前中に礼拝を行うべきだと主張する根拠とはならない。

①紀元 1 世紀の教会が、日曜日の午前中に礼拝を行っていたという証拠はない。

②もちろん、日曜日午前中の礼拝が悪いわけではない。

③新約時代には、礼拝はその会衆にとって最も相応しい日時に行うべきである。

(3) ここでの「週の初めの日」とは、土曜日の夜である。

①食事の後、パウロは説教を開始した。

②ユテコの事故があった。

③事故対応が終わってから、聖餐式を行った。

- ④その後、軽食を食べた。
- ⑤パウロの説教は、明け方まで続いた。
- ⑥その後パウロは、すぐにトロアスを出発した。

2. ユテコの体験と私たち

- (1) 人間的には、ユテコが眠り込んだことには同情の余地がある。

- ①しかし、神の評価基準はより厳しいものである。

- (2) 聖書の教え

- ①ヨナ1:5~6（リーダーの無責任さ）

Jon 1:5 水夫たちは恐れ、彼らはそれぞれ、自分の神に向かって叫び、船を軽くしようと船の積荷を海に投げ捨てた。しかし、ヨナは船底に降りて行って横になり、ぐっすり寝込んでいた。

Jon 1:6 船長が近づいて来て彼に言った。「いったいどうしたことか。寝込んだりして。起きて、あなたの神にお願いしなさい。あるいは、神が私たちに心を留めてくださって、私たちは滅びないですむかもしれない。」

- ②マタ26:40~41（神の時への鈍感さ）

Mat 26:40 それから、イエスは弟子たちのところに戻って来て、彼らの眠っているのを見つけ、ペテロに言われた。「あなたがたは、そんなに、一時間でも、わたしといっしょに目をさましていることができなかったのか。」

Mat 26:41 誘惑に陥らないように、目をさまして、祈っていなさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです。」

- ③マコ13:36~37（終末論への無関心）

Mar 13:36 主人が不意に帰って来たとき眠っているのを見られないようにしなさい。

Mar 13:37 わたしがあなたがたに話していることは、すべての人に言っているのです。目をさましていなさい。」

- ④エペ5:14（イザヤ書のいくつかの聖句をまとめたもの）

Eph 5:14 明らかにされたものはみな、光だからです。それで、こう言われています。／「眠っている人よ。目をさませ。／死者の中から起き上がれ。／そうすれば、キリストが、あなたを照らされる。」

- ⑤1テサ5:6（終わりの時をいかに生きるべきか）

1Th 5:6 ですから、ほかの人々のように眠っていないで、目をさまして、慎み深くしていきましょう。

- (3) 目をさましているには、2つの意味があって、両者を切り離すことはできない。

- ①肉体的意味

- ②霊的意味

「トロアスからミレトへの旅」

使徒 20 : 13～17

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①パウロは、マケドニアとアカヤを経由してエルサレムに行こうとしている。
- ②コリントの港であるケンクレアからエルサレムに向う船に乗ろうとした。
- ③しかし、パウロに対する陰謀があることを知り、計画を変更した。
- ④コリント→ピリピ→トロアス
- ⑤同行の7名は、先に船でトロアスに着いていた。
- ⑥パウロとルカは、先行していた7名とトロアスで合流した。
- ⑦パウロは、トロアスに7日間滞在し、その教会で奉仕をした。
- ⑧ユテコの転落事件があったが、彼が生き返ったので、人々は大いに慰められた。

(2) この箇所は、トロアスからミレトへの旅の航海日誌である。

- ①ビジネスライクな記述であるが、ルカはパウロの旅を忠実に再現している。
- ②重要なのは、ミレトでエペソの長老たちにメッセージが語られた点である。

(3) ルカが記録する3つの重要なメッセージ

- ①第一次伝道旅行：ピシデヤのアンテオケでのメッセージ（使 13 : 16～41）
- ②第二次伝道旅行：アテネでのメッセージ（使 17 : 22～31）
- ③第三次伝道旅行：ミレトでのメッセージ（使 20 : 18～35）

＊次回ミレトでのメッセージを取り上げるが、その前にそこに至る旅程を確認する。

(4) アウトライン：トロアスからミレトへの旅

- ①トロアス→アソス
- ②アソス→ミテレネ
- ③ミテレネ→キヨス→サモス
- ④サモス→ミレト

結論：

- (1) パウロが陸路を取った理由
- (2) パウロと五旬節
- (3) エペソの長老たち

トロアスからミレトへの旅から霊的教訓を学ぶ。

I. トロアス→アソス

1. 13 節

Act 20:13 さて、私たちは先に船に乗り込んで、アソスに向けて出帆した。そしてアソスでパウロを船に乗せることにしていた。パウロが、自分は陸路をとるつもりで、そう決めておいたからである。

(1) パウロの同行者たちは、先に船に乗り込んでトロアスを発った。

- ①ルカも含まれる。
- ②彼らは、パウロよりも先にトロアスを出発した。
- ③アソスまでは、海路の方が陸路よりも時間がかかる。

(2) アソスに着くためには、レクタム岬の沖を回る必要がある。

- ①陸路は、約 30 キロの距離である。
- ②パウロは、単独で陸路を移動することにした。徒歩で 1 日の距離である。

II. アソス→ミテレネ

1. 14 節

Act 20:14 こうして、パウロはアソスで私たちと落ち合い、私たちは彼を船に乗せてミテレネに着いた。

(1) パウロは、アソスで同行者たちに会い、船に乗り込んだ。

- ①そこからミテレネに着いた。約 50 キロの船旅である。
- ②ミテレネは、レスボス島の主要な町である。
- ③レスボス島は、小アジアの西部における最大の島である。

III. ミテレネ→キヨス→サモス

1. 15 節 a

Act 20:15a そこから出帆して、翌日キヨスの沖に達し、次の日サモスに立ち寄り、

(1) ミテレネからキヨス島の沖に達した。

- ①キヨス島は、ホメロス（前 8 世紀頃のギリシアの詩人）が誕生した地である。

(2) 次の日にサモスに寄港した。

- ①サモスは、エペソの真西にある島である。

②サモス島は、ピタゴラスが誕生した地である。

IV. サモス→ミレト

1. 15 節 b

Act 20:15b その翌日ミレトに着いた。

(1) ミレトは、エペソから南に約 50 キロ離れた所にある港町である。

①一行が乗っているような小型船は、風が凪いでいる夜間は、港に停泊する。

②エペソ港は土砂の堆積で水位が浅くなったので、水夫たちには不評であった。

2. 16 節

Act 20:16 それはパウロが、アジアで時間を取られないようにと、エペソには寄港しないで行くことに決めていたからである。彼は、できれば五旬節の日にはエルサレムに着いていたい、と旅路を急いでいたのである。

(1) パウロは、エペソには寄港しなかった。

①エペソに行くと、時間が取られる。

②エペソに行くのは、危険である。

③エルサレムへの旅を急いでいた。

(2) 「できれば五旬節の日にはエルサレムに着いていたい」

①五旬節は、過越の祭りから 50 日後に来る。

②巡礼祭をエルサレムで祝いたいというのは、ユダヤ人として当然のことである。

③祭りの時期にエルサレムに上ると、多くの友人たちと会える。

④祭りの期間に、異邦人信者からの献金を届けることは、教会の一致を示す最善の方法である。

2. 17 節

Act 20:17 パウロは、ミレトからエペソに使いを送って、教会の長老たちを呼んだ。

(1) ミレトで船荷を積み降ろすのに、3 日前後かかったであろう。

①その時間を利用して、パウロはエペソに使いを送って教会の長老たちを呼んだ。

②彼らが着くのに、いくら早くても 2 日はかかる。

③エペソからミレトに来る者たちは、大きな犠牲を払った。

結論：

1. パウロが陸路を取った理由

(1) トロアスからアソスまで、一日の道のりである。

①パウロは、船に乗らないで、陸路を取った。

(2) 考えられる理由

①経済的理由

②歩くのは、運動になる。

③途中で伝道したり、信者と交わったりできる。

④最も大切な理由は、神との交わりである。

*パウロは、信者との交わりを好んだが、ひとりになる時間も楽しんだ。

*神の御心を求める必要があった。

*エルサレム教会への献金について、祈る必要があった。

2. パウロと五旬節

(1) ユダヤ人信者と律法の関係

①ルカは、パウロが五旬節までにエルサレムに着こうとしていることを非難していない。

②ユダヤ人信者には、律法を守る自由も、守らない自由もある。

③ユダヤ人としてエルサレムで巡礼祭を祝いたいと願うのは、当然のことである。

(2) 異邦人信者は、メシアニックジューの考え方を受け入れるべきである。

①律法を救いの条件とするなら、それは間違っている。

②しかし、ユダヤ人信者には律法を守る自由も守らない自由もある。

(ILL) フルクテンバウム師、ヒル師

③律法は、異邦人信者には無関係である。

3. エペソの長老たち

(1) リーダーの呼び名

①長老（プレスビューテロス）（使 20：17）

*英語では elder である。

②監督（エピスコポス）（使 20：28）

*英語では overseer、bishop である。

③牧する役割が与えられた者（ポイマイノウという動詞）（使 20：28）

*名詞形では、牧師である。

*ヨハ 21：16

Joh 21:16 イエスは再び彼に「ヨハネの子シモン。あなたはわたしを愛していますか」と言われた。ペテロは答えた。「はい、主よ。私があなたを愛していることは、あなたをご存じです。」イエスは彼に言われた。「わたしの羊を牧しなさい。」

(2) 聖書的には、長老、監督、牧師は、同一の役職を指している。

①リーダーの役割は、信者を導き、監督し、牧することである。

(3) 新約聖書が想定する教会の指導体制は、複数のリーダーによる指導である。

①特に、エペソ教会のような大教会では、複数のリーダーが必要である。

②複数のリーダーによる指導体制の回復が望まれる。

(ILL) 野中郁次郎氏（一橋大学名誉教授）のベストセラー『失敗の本質』

「エペソの長老たちへのメッセージ（1）」

使徒 20：18～24

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①パウロは、エルサレムに行こうとしている。
- ②パウロは、トロアスに7日間滞在し、その教会で奉仕をした。
- ③ユテコの転落事件があったが、彼が生き返ったので、人々は大いに慰められた。
- ④トロアスからミレトに移動した（ルカは、航海日誌を残している）。
- ⑤ミレトでエペソの長老たちにメッセージが語られた。

(2) 前回の最後の聖句：使 20：17

Act 20:17 パウロは、ミレトからエペソに使いを送って、教会の長老たちを呼んだ。

- ①ミレトで船荷を積み降ろすのに、3日前後かかったであろう。
- ②その時間を利用して、パウロはエペソに使いを送って教会の長老たちを呼んだ。
- ③彼らが着くのに、いくら早くても2日はかかる。
- ④エペソからミレトに来る者たちは、大きな犠牲を払った。

(3) ルカが記録する3つの重要なメッセージと5つの弁明

- ①第一次伝道旅行：ピシデヤのアンテオケでのメッセージ（使 13：16～41）
- ②第二次伝道旅行：アテネでのメッセージ（使 17：22～31）
- ③第三次伝道旅行：ミレトでのメッセージ（使 20：22～31）
- ④5つの弁明（使 22～26 章）

(4) ミレトでのメッセージの特殊性と重要性

- ①これは、信者に向けて語られた唯一のメッセージである。
- ②これは、パウロ書簡のミニチュア版である。
 - *励まし、警告、勧め
 - *パウロ書簡に特徴的な語彙が多く出て来る。
- ③ルカは、速記でメッセージの内容をそのまま書き留めたと思われる。
 - *医学生は、講義内容を速記で書き留めていた。
 - *ルカには、パウロ書簡を読むチャンスがなかった。

(5) エペソの長老たちへのメッセージの構造

- ①エペソにおける過去の奉仕（18～21 節）

* 「you know」で始まる。

②エルサレムを訪問しようとする現在の計画（22～24 節）

* 「and now behold」で始まる。

③エペソ教会の長老たちの将来の責務（25～31 節）

* 「and now behold I know」で始まる。

④結びの言葉（32～35 節）

* 「and now」で始まる。

(6) アウトライン：エペソの長老たちへのメッセージ

①エペソにおける過去の奉仕（18～21 節）

②エルサレムを訪問しようとする現在の計画（22～24 節）

結論：聖書的リーダーシップ

エペソの長老たちへのメッセージから霊的教訓を学ぶ。

I. エペソにおける過去の奉仕（18～21 節）

1. 18 節

Act 20:18 彼らが集まって来たとき、パウロはこう言った。／「皆さんは、私がアジアに足を踏み入れた最初の日から、私がいつもどんなふうにあなたがたと過ごして来たか、よくご存じです。

(1) エペソでの約3年弱の奉仕を振り返る。

①パウロは、自分を批判する人たちが出て来たのではないかと、心配している。

②そこで、長老たちに、自分がどのように生活したかを思い起こさせている。

*パウロは、秘密で何かをしたことはない。

*パウロのメッセージと振る舞いは、みんなに知られていた。

③自ら手本を示すことによって、主に忠実に生きるように勧めている。

④1テサ2:4～7

1Th 2:4 私たちは神に認められて福音をゆだねられた者ですから、それにふさわしく、人を喜ばせようとしてではなく、私たちの心をお調べになる神を喜ばせようとして語るのです。

1Th 2:5 ご存じのとおり、私たちは今まで、へつらいのことばを用いたり、むさぼりの口実を設けたりしたことはありません。神がそのことの証人です。

1Th 2:6 また、キリストの使徒たちとして権威を主張することもできたのですが、私たちは、あなたがたからも、ほかの人々からも、人からの名誉を受けようとはしませんでした。

1Th 2:7 それどころか、あなたがたの間で、母がその子どもたちを養い育てるように、優しく

ふるまいました。

＊パウロの姿勢は、一貫していた。

2. 19～21 節

Act 20:19 私は謙遜の限りを尽くし、涙をもって、またユダヤ人の陰謀によりわが身にふりかかる数々の試練の中で、主に仕えました。

Act 20:20 益になることは、少しもためらわず、あなたがたに知らせました。人々の前でも、家々でも、あなたがたを教え、

Act 20:21 ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰とをはっきりと主張したのです。

(1) パウロの奉仕の特徴の 1 番目は、謙遜である。

①彼は、謙遜の限りを尽くした。

②エペ 4 : 1～3

Eph 4:1 さて、主の囚人である私はあなたがたに勧めます。召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。

Eph 4:2 謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、

Eph 4:3 平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。

(2) パウロの奉仕の特徴の 2 番目は、涙（悲しみ）である。

①彼は、多くの悲しみを経験した。

②2 コリ 2 : 4

2Co 2:4 私は大きな苦しみと心の嘆きから、涙ながらに、あなたがたに手紙を書きました。それは、あなたがたを悲しませるためではなく、私があなたがたに対して抱いている、あふれるばかりの愛を知っていただきたいからでした。

(3) パウロの奉仕の特徴の 3 番目は、福音に敵対する者たちからの迫害である。

①「ユダヤ人の陰謀によりわが身にふりかかる数々の試練」

②使 19 : 9

Act 19:9 しかし、ある者たちが心をかたくなにして聞き入れず、会衆の前で、この道をののしったので、パウロは彼らから身を引き、弟子たちをも退かせて、毎日ツラノの講堂で論じた。

(4) パウロの奉仕の特徴の 4 番目は、忠実な福音の伝達である。

①相手の益になることは、すべて教えた。

②ロマ 1 : 16

Rom 1:16 私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じる

すべての人にとって、救いを得させる神の力です。

③あらゆる機会を捉え、あらゆる場所で教えた。

＊「家々でも」とは、家の教会での学び会のことであろう。

＊集っている長老たちは、家の教会のリーダーたちであろう。

④ユダヤ人にも異邦人にも教えた。

⑤「神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰」

＊救いとは、イエス・キリストを通して父なる神に立ち帰ることである。

＊パウロは、ユダヤ人にも異邦人にも同じ福音を語った。

⑥ロマ 10：9～10

Rom 10:9 なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。

Rom 10:10 人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。

Ⅱ. エルサレムを訪問しようとする現在の計画（22～24 節）

1. 22～23 節

Act 20:22 いま私は、心を縛られて、エルサレムに上る途中です。そこで私にどんなことが起こるのかわかりません。

Act 20:23 ただわかっているのは、聖霊がどの町でも私にはっきりとあかしされて、なわめと苦しみが私を待っていると言われることです。

(1) 現在の状況もまた、長老たちへの教訓となる。

①今パウロは、エルサレムに上る途中にある。

②異邦人教会からの献金を届けるために、五旬節までにエルサレムに着きたいと願っている。

③パウロには、これが御心であると確信があった。

(2) 訳文の比較

①「心を縛られて」（新改訳）

②「御霊に縛られて」（新改訳 2017）

③「“霊” に促されて」（新共同訳）

④「御霊に迫られて」（口語訳）

⑤「心搦(から)められて」（文語訳）

(3) 「そこで私にどんなことが起こるのかわかりません」

①問題が起こるであろうことは、予感していた。

②ユダヤ人たちによって逮捕されることは、すでに預言されていたと思われる。

(4)「なわめと苦しみが私を待っている」

①これは、聖霊による（預言者を通した）語りかけである。

②聖霊は、エルサレムに上ることを禁じてはいない。

③危険が待っていると告げているだけである。

④ロマ 15：30～31

Rom 15:30 兄弟たち。私たちの主イエス・キリストによって、また、御霊の愛によって切にお願いします。私のために、私とともに力を尽くして神に祈ってください。

Rom 15:31 私がユダヤにいる不信仰な人々から救い出され、またエルサレムに対する私の奉仕が聖徒たちに受け入れられるものとなりますように。

2. 24 節

Act 20:24 けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。

(1) パウロは、自分の身の安全よりも、主イエスに忠実に生きることを願った。

①主イエスから、福音伝道の使命を与えられている。

②人生のゴールは、走るべき行程を走り尽くすことである。

③そのためには、自分のいのちは少しも惜しいとは思わない。

結論：聖書的リーダーシップ

1. 謙遜な態度

(1) クリスマンは、イエス・キリストに従う者である。

(2) ペリ 2：1～11 に、キリストの謙遜が書かれている。

①謙遜は、ペリビ教会の問題を解決する鍵である。

②神は、謙遜な者を高く上げてくださる。

③ペリ 2：5～9

Php 2:5 あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。

Php 2:6 キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、

Php 2:7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、

Php 2:8 自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。

Php 2:9 それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。

④1 ペテ 5 : 1～4

1Pe 5:1 そこで、私は、あなたがたのうちの長老たちに、同じく長老のひとり、キリストの苦難の証人、また、やがて現れる栄光にあずかる者として、お勧めします。

1Pe 5:2 あなたがたのうちにいる、神の羊の群れを、牧しなさい。強制されてするのはなく、神に従って、自分から進んでそれをなし、卑しい利得を求める心からではなく、心を込めてそれをしなさい。

1Pe 5:3 あなたがたは、その割り当てられている人たちを支配するのではなく、むしろ群れの模範となりなさい。

1Pe 5:4 そうすれば、大牧者が現れるときに、あなたがたは、しばむことのない栄光の冠を受けるのです。

2. 忠実な奉仕

(1) 福音を正確に伝える。

①人は、恵みと信仰によって救われる。

(2) 神の計画の全貌を伝える。

①使 20 : 27

Act 20:27 私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。

3. 聖霊の導き

(1) パウロは、聖霊の強い促しを受けていた。

①使 16 : 6～8

Act 16:6 それから彼らは、アジアでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、ブルギヤ・ガラテヤの地方を通った。

Act 16:7 こうしてムシヤに面した所に來たとき、ビテニヤのほうに行こうとしたが、イエスの御霊がそれをお許しにならなかった。

Act 16:8 それでムシヤを通して、トロアスに下った。

(2) エルサレムに上るのは、聖霊の促しによることである。

①そこには危険が待ち受けている。

②しかしパウロは、身の安全を守ることよりも、神の御心を優先させた。

(3) ピリ 1 : 20～21

Php 1:20 それは私の切なる祈りと願いにかなっています。すなわち、どんな場合にも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにも死ぬにも私の身によって、キリストがあがめられることです。

Php 1:21 私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です。

「エペソの長老たちへのメッセージ（2）」

使徒 20：25～38

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①パウロは、エルサレムに行こうとしている。
- ②パウロは、トロアスからミレトに移動した（ルカは、航海日誌を残している）。
- ③ミレトでエペソの長老たちにメッセージが語られた。

(2) 3つの重要なメッセージと5つの弁明

- ①第一次伝道旅行：ピシデヤのアンテオケでのメッセージ（使 13：16～41）
- ②第二次伝道旅行：アテネでのメッセージ（使 17：22～31）
- ③第三次伝道旅行：ミレトでのメッセージ（使 20：22～31）
- ④5つの弁明（使 22～26章）

(3) ミレトでのメッセージの特殊性と重要性

- ①これは、信者に向けて語られた唯一のメッセージである。
- ②これは、パウロ書簡のミニチュア版である。

(4) エペソの長老たちへのメッセージの構造

- ①エペソにおける過去の奉仕（18～21節）
- ②エルサレムを訪問しようとする現在の計画（22～24節）
- ③エペソ教会の長老たちの将来の責務（25～31節）
- ④結びの言葉（32～35節）

(5) アウトライン：エペソの長老たちへのメッセージ

- ①エペソ教会の長老たちの将来の責務（25～31節）
- ②結びの言葉（32～35節）
- ③別離の祈り（36～38節）

結論：聖書的リーダーシップ

エペソの長老たちへのメッセージから霊的教訓を学ぶ。

I. エペソ教会の長老たちの将来の責務（25～31節）

1. 25 節

Act 20:25 皆さん。御国を宣べ伝えてあなたがたの中を巡回した私の顔を、あなたがたはもう二度と見ることがないことを、いま私は知っています。

(1)「神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終える」(24 節)

①「御国を宣べ伝えて」(25 節)

②異邦人もまた恵みと信仰によって救われ、千年王国に入る特権に与る。

③恵みの福音と御国とは相関関係にあることが分かる。

(2)「あなたがたはもう二度と見ることがないことを、いま私は知っています」

①パウロは、エルサレムでの死を予感していた。

②彼は、エペソの長老たちに再びメッセージを語ることはないと思っていた。

③幸いなことに、この予想は外れた。

*彼は、エルサレムでは死ななかった。

*彼は、後にエペソを訪問する機会に恵まれる(1 テモ 3:14、4:13 参照)。

2. 26～27 節

Act 20:26 ですから、私はきょうここで、あなたがたに宣言します。私は、すべての人たちが受けるさばきについて責任がありません。

Act 20:27 私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。

(1) パウロは、自分には責任がないことを宣言する。

①彼は、キリストの教会を迫害した罪を否定しているのではない。

②また、最初の殉教者ステパノの死に関わった罪を否定しているのでもない。

③これは、忠実な働きをエペソで行ったという宣言である。

④コリントでの伝道

Act 18:6 しかし、彼らが反抗して暴言を吐いたので、パウロは着物を振り払って、「あなたがたの血は、あなたがたの頭上にふりかけられ。私には責任がない。今から私は異邦人のほうに行く」と言った。

⑤エペソでの伝道

Act 19:10 これが二年の間続いたので、アジアに住む者はみな、ユダヤ人もギリシヤ人も主のことばを聞いた。

(2) パウロは、預言者エゼキエルに倣って、無罪宣言を行っている。

①エゼ 33:1～9 (特に 8～9 節)

Eze 33:8 わたしが悪者に、『悪者よ。あなたは必ず死ぬ』と言うとき、もし、あなたがその悪

者にその道から離れるように語って警告しないなら、その悪者は自分の咎のために死ぬ。そしてわたしは彼の血の責任をあなたに問う。

Eze 33:9 あなたが、悪者にその道から立ち返るよう警告しても、彼がその道から立ち返らないなら、彼は自分の咎のために死ななければならない。しかし、あなたは自分のいのちを救うことになる。

②預言者の使命は、神のことばを忠実に伝えることである。

③結果に関しては、神が責任を負ってくださる。

(3) 「神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいた」

①聖句をすべて教えたということではない。

②天地創造から終末論に至るまで、神のご計画の全貌を教えたということである。

③それゆえ、神の招きにどういう態度を取るかは、聴く側の責任である。

④神のご計画の全貌を教えることは、牧師・伝道者にとって最優先課題である。

⑤神のご計画の全体像を理解することは、健全なクリスチャン生活を送るための必須条件である。

3. 28～30 節

Act 20:28 あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。

(1) 「自分自身と群れの全体とに気を配りなさい」

①群れの世話をするために、先ず自分自身を整える必要がある。

(2) 「神がご自身の血をもって買い取られた神の教会」

①教会は、神の所有物である。

②この聖句は、イエス・キリストの神性を教えている。

(3) 長老たちは、聖霊によって立てられた群れの監督たちである。

①ギリシア語で「エписコpos」である。

②彼らの使命は、神の教会を牧することである。

③同じ人たちが 3 つの用語で呼ばれている。

*長老（presbyteros）（使 20：17）：尊厳ある地位

*監督（episkopos）（使 20：28）：導くという職責

*牧師（poimen）（使 20：28）：霊的に養うという職責

4. 29～31 節

Act 20:29 私が出発したあと、狂暴な狼があなたがたの中に入り込んで来て、群れを荒らし回ることを、私は知っています。

Act 20:30 あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。

Act 20:31 ですから、目をさましていなさい。私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがたひとりひとりを訓戒し続けて来たことを、思い出してください。

(1) 「自分自身と群れの全体とに気を配りなさい」と命じる理由

①凶暴な狼が教会に入り込んで来る。

＊狼（複数形）とは、偽教師たちのことである。

＊彼らは、群れを荒らし回る。

②教会の中からも偽教師たちが現れる

＊彼らは、キリストの弟子たちを自分のほうに引き込もうとする。

(2) 問題への対処法

①目をさましている。

＊霊的に注意深くしている。

②パウロが教えてきたことを思い出す。

＊「私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがたひとりひとりを訓戒し続けて来たこと」

＊パウロの奉仕には、感情的な要素が深く関わっていた。

Ⅱ. 結びの言葉（32～35 節）

1. 32 節

Act 20:32 いま私は、あなたがたを神とその恵みのみことばとにゆだねます。みことばは、あなたがたを育成し、すべての聖なるものとされた人々の中にあつて御国を継がせることができるのです。

(1) パウロは、エペソの長老たちを神とその恵みのことばとに委ねた。

①救いを完成させてくださるのは、神である。

＊聖徒たちに、千年王国を継がせてくださる。

②救いの完成のために用いられるのが、神のことばである。

＊神への信仰は、みことばの実行によって証明される。

2. 33～34 節

Act 20:33 私は、人の金銀や衣服をむさぼったことはありません。

Act 20:34 あなたがた自身が知っているとおり、この両手は、私の必要のためにも、私ともにいる人たちのためにも、働いて来ました。

(1) メッセージの締めくくりに、再度、自らの手本を示す。

①パウロは、自給伝道を行った。

②その結果、同労者や弱い者たちを助けることができた。

3. 35 節

Act 20:35 このように労苦して弱い者を助けなければならないこと、また、主イエスご自身が、『受けるよりも与えるほうが幸いである』と言われたみことばを思い出すべきことを、私は、万事につけ、あなたがたに示して来たのです。」

(1) 自らの手本によって教えたことは、労苦して弱い者を助けるということである。

(2) 「受けるよりも与えるほうが幸いである」

①このことばは、福音書には出て来ないが、イエスの教えの要約にはなっている。

②パウロは、主イエスのことばの伝承を用いている可能性がある。

Ⅲ. 別離の祈り（36～38 節）

1. 36 節

Act 20:36 こう言い終わって、パウロはひざまずき、みなの方とともに祈った。

(1) 通常は、立ったままの祈りであるが、ここでの祈りは特別である。

①ルカ 22：41 ゲツセマネの園でのイエス

②使 9：40 タビタを甦らせるためのペテロの祈り

③使 21：5 ツロの兄弟たちの別離の祈り

2. 37～38 節

Act 20:37 みなは声をあげて泣き、パウロの首を抱いて幾度も口づけし、

Act 20:38 彼が、「もう二度と私の顔を見ることがないでしょう」と言ったことばによって、特に心を痛めた。それから、彼らはパウロを船まで見送った。

(1) エペソの長老たちは、深い愛と悲しみを表現した。

①パウロの首を抱いて幾度も口づけした。

②心を痛めた。

* 「もう二度と私の顔を見ることがないでしょう」と言ったことば

(2) エルサレムへの旅（使 21：1～25）

①訪問地の信徒たちは、同様の態度を示す。

②それを詳細に記録している理由は、異邦人信者とエルサレムのユダヤ人の対比

＊異邦人は福音に応答したが、ユダヤ人は拒否した。

結論：聖書的リーダーシップ

1. 謙遜な態度

2. 忠実な奉仕

3. 聖霊の導き

4. 教会は神の所有物という認識

Act 20:28 あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。

(1) 霊的指導者には、群れ全体に気を配る責任がある。

(2) 霊的指導者には、神のことばで群れを養う責任がある。

(3) 霊的指導者は、責任を負い過ぎてはならない。

(4) 責任を負うことについて、バランスが必要である。

(5) イエスの教え（マタ 23：8）

Mat 23:8 しかし、あなたがたは先生と呼ばれてはいけません。あなたがたの教師はただひとりしかなく、あなたがたはみな兄弟だからです。

①これは、「教師と生徒の関係」についての教えである。

②ラビは、生徒に対して不当とも思えるほどの権威を行使した。

③彼らは、自分の生徒の職業や結婚にまで決定権を行使していた。

④このような考え方をそのまま推し進めていけば、カルト的な集団が出来上がる。

⑤イエスが禁止したのは、ある人が別の人に絶対的な権威を振るうことである。

5. 偽教師と戦う能力

Act 20:29 私が出発したあと、狂暴な狼があなたがたの中に入り込んで来て、群れを荒らし回することを、私は知っています。

Act 20:30 あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。

(1) パウロのテモテへの教え（2テモ 4：1～4）

2Ti 4:1 神の御前で、また、生きている人と死んだ人とをさばかれるキリスト・イエスの御前で、その現れとその御国を思って、私はおごそかに命じます。

2Ti 4:2 みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりとやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。

2Ti 4:3 というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言ってもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、

2Ti 4:4 真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです。

（2）エペソ教会への褒め言葉（黙2：6）

Rev 2:6 しかし、あなたにはこのことがある。あなたはニコライ派の人々の行いを憎んでいる。わたしもそれを憎んでいる。

- ①「ニコライ派」とは「人々の支配者」という意味である。
- ②聖職者と一般信徒とを区別し、聖職者による教会支配を意図する人々が出現しつつあった。
- ③エペソ教会は、そのような傾向を憎んだ。
- ④主イエスは、その姿勢をよしとされた。

6. 神に委ねる信仰

Act 20:32 いま私は、あなたがたを神とその恵みのみことばとにゆだねます。みことばは、あなたがたを育成し、すべての聖なるものとされた人々の中にあって御国を継がせることができるのです。

（1）パウロは、後任の誰かにエペソの長老たちを委ねたのではない。

- ①神に委ねた。
- ②恵みのことばに委ねた。

（2）パウロの聖書観が明確に表現されている。

- ①みことばには、信徒を育成する力がある。
- ②みことばには、御国を継がせる力がある。

「ミレトからツロへ」

使徒 21 : 1～6

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①前回の最後の聖句(使 20 : 37～38)

Act 20:37 みなは声をあげて泣き、パウロの首を抱いて幾度も口づけし、

Act 20:38 彼が、「もう二度と私の顔を見ることはないでしょう」と言ったことばによって、特に心を痛めた。それから、彼らはパウロを船まで見送った。

②パウロは、エルサレムに行こうとしている。

③パウロは、ミレトからエルサレムに向かって移動する。

*ルカは、エルサレムに上る旅について詳細な記録を残している。

*使 21 : 1～18 は、3 度目の「私たち章句」(we section) である。

*その箇所には、深い神学的意味がある。

*ルカは、イエスとパウロを対比させようとしている。

④ミレトを発ったパウロは、コス→ロドス→ツロと移動する。

⑤ツロに着いたパウロは、そこに7日間滞在する。

(2) アウトライン

①ミレトからコス、ロドス、パタラへ(1 節)

②パタラからツロへ(2～3 節)

③ツロの弟子たちとの交わり(4～6 節)

結論：パウロとイエスの対比

エルサレムへの旅から霊的教訓を学ぶ。

I. ミレトからコス、ロドス、パタラへ(1 節)

1. 1 節

Act 21:1 私たちは彼らと別れて出帆し、コスに直航し、翌日ロドスに着き、そこからパタラに渡った。

(1) ミレトからコスへ

①パウロが乗った船は小型船で、沿岸地帯を航行する。

*パウロがこの船を雇った可能性がある。

②小型船の場合は、海岸沿いを航行し、夜になると港に停泊した。

(ILL) 日本の千石船(せんごくぶね)

*北前船は、積載重量約 150 トン（それ以上のものもあった）。

③コス島は、ミレトから約 65 キロ南にある島である。

④コス島は、「ヒポクラテスの誓い」で有名なヒポクラテス誕生の地である。

*この「誓い」は、医師の倫理・任務などについてのギリシア神への宣誓文。

*コス島には、医学校があった。

(2) コス島からロドス島へ

①ロドス島にある主要都市の名前がロドス（バラの花という意味）である。

②コス島からロドス島へは、約 140 キロの航海である。

③ロドスは、コスモポリタンの町である。

④世界の七不思議

*ギザのピラミッド

*バビロンの空中庭園

*エペソのアルテミス神殿

*オリンピアのゼウス像

*ハリカルナッソスのマウソロス霊廟

*ロドス島の巨像

*アレクサンドリアの大灯台

⑤ロドス島の巨像

*紀元前 3 世紀頃に建造された。

*太陽神ヘリオスをかたどった彫像である。両足を広げて立つ灯台である。

*全長 34m、台座まで含めると約 50m（自由の女神像に匹敵する大きさ）。

*ヘリオスは、同じ太陽神のアポロン（ローマ名アポロ）と混同されたため、「アポロの巨像」とも呼ばれる。

*パウロの時代には、この像は壊れていた。

(4) ロドス島からパタラへ

①約 95 キロ東に航海するとパタラの港に着く。

②ミレトからパタラまでは、3 日間で移動できたはずである。

③ここまでは、内海を航海する小型船での移動であった。

④何百という船が、この航路を往き来していた。

II. パタラからツロへ (2～3 節)

1. 2 節

Act 21:2 そこにはフェニキヤ行きの船があったので、それに乗って出帆した。

- (1) パタラで大型船に乗り換えることができた。
 - ①各駅停車から急行に乗り換えたようなものである。
 - ②パタラから 640 キロ先のツロに直行する船便である。
 - *この船は、穀物か果物を運ぶ輸送船であろう。
 - *地中海を横断する 5 日間の船旅である。
 - ③フェニキヤは、シリアの海岸地帯のことである。
 - *その中心都市が、商業都市のツロである。
 - *現在のレバノンに当たる。
 - ④当時の船旅は、目的地に向かう船を見つけ、それに乗るしかなかった。
 - *船の航行の予定に従うしか方法はない。

2. 3 節

Act 21:3 やがてキプロスが見えて来たが、それを左にして、シリヤに向かって航海を続け、ツロに上陸した。ここで船荷を降ろすことになっていたからである。

- (1) 船は、キプロス島の南側を航行した。
 - ①キプロス島は、バルナバの故郷で第一次伝道旅行の最初の訪問地であった。
 - ②思い出深い地である、今回はそこには立ち寄らなかった。
- (2) ツロで船が停泊した。船荷を降ろすためである。
 - ①パウロは先を急いでいたが、自分で予定を組むことはできなかった。
 - ②トロアスで 7 日間、ツロで 7 日間滞在した理由は、それである。
 - ③しかしパウロは、船が停泊する日数を有効に活用した。

Ⅲ. ツロの弟子たちとの交わり（4～6 節）

1. 4 節

Act 21:4 私たちは弟子たちを見つけ出して、そこに七日間滞在した。彼らは、御霊に示されて、エルサレムに上らぬようと、しきりにパウロに忠告した。

- (1) 私たちとは、パウロと 8 人の同行者たちである。
 - ①その中には、ルカも含まれていた。
- (2) 彼らは、ツロの弟子たち（信者たち）を探した。
 - ①ツロに教会が出来ていた。
 - ②その設立には、パウロも間接的に関わっていた。

③使 11：19

Act 11:19 さて、ステパノのことから起こった迫害によって散らされた人々は、フェニキヤ、キプロス、アンテオケまでも進んで行ったが、ユダヤ人以外の者にはだれにも、みことばを語らなかった。

④パウロによる教会の迫害が、伝道の拡大につながった。

*このことが、パウロにとっては慰めとなったはずである。

⑤一行は、ツロの信者たちと 7 日間交わりを持った。

*旅の途上にある兄弟たちをもてなすのは、信者の務めである。

*安宿に泊まるよりも、はるかに安全で快適であった。

(3)「彼らは、御霊に示されて、エルサレムに上らぬようにと、しきりにパウロに忠告した」

①御霊がエルサレムに上ることを禁じているという意味でない。

②御霊は、ツロの信者たちにも、エルサレムで危険が待っていることを啓示した。

*これは、それまでにパウロに示されていた内容と同じである。

③信者たちは、パウロの身の上を案じ、エルサレムに上らないように忠告した。

④御霊の示しは、迫害への準備をするようにという、パウロに対する警告である。

⑤パウロの確信

*エルサレムに上ることは主の御心である。

*危険が待っているので、あらゆる準備をする必要がある。

2. 5～6 節

Act 21:5 しかし、滞在の日数が尽きると、私たちはそこを出て、旅を続けることにした。彼らはみな、妻や子どももいっしょに、町はずれまで私たちを送って来た。そして、ともに海岸にひざまずいて祈ってから、私たちは互いに別れを告げた。

Act 21:6 それから私たちは船に乗り込み、彼らは家へ帰って行った。

(1) 船が出帆する時が来た。

①この場面は、ミレトの海岸での祈りほど劇的でないが、それでも感動的である。

②信者たちは妻子をとめない、町外れまで見送りに来た。

③パウロの一行は、彼らとともに海岸にひざまずいて祈り、別れを告げた。

④たった 1 週間で、深い信頼関係が生まれていた。

(2) パウロの一行は船に乗った。

①信者たちは家に帰って行った。

結論：パウロとイエスの対比

*エルサレムへの旅は、受難に向かう旅である。

*3つの類似点を上げてみる。

1. ユダヤ人による敵対と、異邦人に引き渡すという陰謀

(1) ルカ 18 : 31～34

Luk 18:31 さてイエスは、十二弟子をそばに呼んで、彼らに話された。「さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子について預言者たちが書いているすべてのことが実現されるのです。

Luk 18:32 人の子は異邦人に引き渡され、そして彼らにあざけられ、はずかしめられ、つばきをかけられます。

Luk 18:33 彼らは人の子をむちで打ってから殺します。しかし、人の子は三日目によみがえります。」

Luk 18:34 しかし弟子たちには、これらのことが何一つわからなかった。彼らには、このことばは隠されていて、話された事が理解できなかった。

(2) 使 20 : 22～23

Act 20:22 いま私は、心を縛られて、エルサレムに上る途中です。そこで私にどんなことが起こるのかわかりません。

Act 20:23 ただわかっているのは、聖霊がどの町でも私にはっきりとあかしされて、なわめと苦しみが私を待っていると言われることです。

2. 3度繰り返されるエルサレムでの受難の預言

(1) イエスの場合

①ルカ 9 : 21～22（弟子たちの信仰告白の後）

Luk 9:21 するとイエスは、このことをだれにも話さないようにと、彼らを戒めて命じられた。

Luk 9:22 そして言われた。「人の子は、必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、そして三日目によみがえらねばならないのです。」

②ルカ 9 : 43～45（山麓での悪霊の追い出しの後）

Luk 9:43 人々はみな、神のご威光に驚嘆した。／イエスのなさったすべてのことに、人々がみな驚いていると、イエスは弟子たちにこう言われた。

Luk 9:44 「このことばを、しっかりと耳に入れておきなさい。人の子は、いまに人々の手に渡されます。」

Luk 9:45 しかし、弟子たちは、このみことばが理解できなかった。このみことばの意味は、

わからないように、彼らから隠されていたのである。また彼らは、このみことばについてイエスに尋ねるのを恐れた。

③ルカ 18 : 31～34 (エルサレムへの途上。上記に取り上げた聖句)

(2) パウロの場合

①使 20 : 22～23 (上記に取り上げた聖句)

②使 21 : 4 (ツロ)

Act 21:4 私たちは弟子たちを見つけ出して、そこに七日間滞在した。彼らは、御霊に示されて、エルサレムに上らぬようにと、しきりにパウロに忠告した。

③使 21 : 10～11 (カイザリヤ)

Act 21:10 幾日かそこに滞在していると、アガボという預言者がユダヤから下って来た。

Act 21:11 彼は私たちのところに来て、パウロの帯を取り、自分の両手と両足を縛って、『この帯の持ち主は、エルサレムでユダヤ人に、こんなふう to 縛られ、異邦人の手に渡される』と聖霊がお告げになっています」と言った。

3. エルサレムに上るといふ堅い意志と、父なる神への従順

(1) ルカ 22 : 42～44

Luk 22:42 「父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。」

Luk 22:43 すると、御使いが天からイエスに現れて、イエスを力づけた。

Luk 22:44 イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた。

(2) 使 20 : 22～24

Act 20:22 いま私は、心を縛られて、エルサレムに上る途中です。そこで私にどんなことが起こるのかわかりません。

Act 20:23 ただわかつているのは、聖霊がどの町でも私にはっきりとあかしされて、なわめと苦しみが私を待っていると言われることです。

Act 20:24 けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。

*ルカは、パウロの信頼性について証言しているのである。

*使徒たちの教えは、信頼に足る。